

卒業論文の手引き 2012年版

(初版:1983、改訂:1984, 1986, 1989, 1995, 1998, 2001, 2004, 2008, 2012)

専攻 : 国士舘大学文学部史学地理学科
地理・環境専攻

学籍番号 : 番

氏名 :

指導教員 :

まえがき：この手引きの使い方

この「卒業論文の手引き」は、国士舘大学文学部史学地理学科に在籍する地理・環境専攻学生用として書かれたもので、論文作成の準備から執筆、提出に至る具体的な方法と注意事項を記したものである。

この手引きでは、自然地理・人文地理（および地理学と関連した環境分野）の領域を問わず、幅広い地理・環境分野の学生が利用できるように、自然科学・社会科学・人文科学に共通した学術論文作成上の基本的ルールを示した。

3年次および4年次に在籍する地理・環境専攻学生は、ここに示された諸事項に精通し、論文提出の締切期間近になってあわてることのないよう、時間的余裕をもって卒業論文作成の準備にかかる必要がある。特に教育実習を控えている学生やサークル活動に参加している学生は、日頃の授業出席や春期・秋期試験の準備に加えて、就職活動という非常に厳しい時間配分の中で卒業論文を書くわけであるから、それ相当の覚悟で臨まなければならない。

卒業論文は内容もさることながら、所定の規定に基づいて書かれなければならない。これらがすべて2月上～中旬に行なわれる卒業論文公開口頭試験で問われる形となる。この手引きには、そうした卒業論文の作成に必要な最低限の事項がすべて書かれている。論文を書く前に一度熟読することはもちろん、論文の執筆中にもつねに手許に置き、おりにふれ、決められている卒論の書式・禁止事項・注意事項などについて確認しながら、卒業論文を作成すること。

すべての学生がこの厳しさを克服して無事卒業されることを希望する。

注意！ 実際の卒論では、この部分に「要旨」が入ることになる。
間違っても「まえがき」などここに入れないように。

目次

まえがき：この手引きの使い方	i
目次	ii
I. はじめに	1
II. 卒論に関する基本事項	3
1. 「卒業論文」と「地理学演習1・2、3・4」	3
2. 書きおろしの禁止	3
3. 論文の提出	3
1) 提出場所と方法	3
2) 提出期限	3
4. 公開口頭試験	4
5. 卒論の評価	4
6. 卒論の保存・永久貸出し	5
III. 論文の体裁	6
1. 論文の分量	6
2. 用紙	6
3. 文章表現上の注意	6
4. 数字・年号の記述	7
5. 提出論文の構成	7
1) 表紙	8
2) 中扉	8
3) 要旨	8
4) 目次	8
5) 図表目次	8
6) 後記（または謝辞）	9
7) 注（または脚注）	9
8) 付録	10
IV. 図・表・写真の体裁	11
1. 全般的説明	11
1) 図・表・写真の番号と標題	12
2) 出典	12
3) 本文中の記載方法	13
2. 図表	13
1) 図表の質	13
2) 記号・凡例等	13
3) 調査地域の概略図と市販の地形図	13
4) 標準寸法外の図表	14
3. 写真	14
V. 卒論のテーマの建て方	15
1. 地理学（および地理学と関連した環境分野）の 論文のテーマ＝目的とは？	15
2. 地理学の歴史～二つの地理学の存在	15

3.	2種類の目的～記述と説明	17
4.	テーマ設定に際して注意すべき点	18
5.	論文の題目	20
6.	学術論文の目的とジャンル：	
	『地理学評論』『人文地理』の事例	21
VI.	本文の構成と内容：論文の書き方	25
1.	本文の章構成	25
2.	基本的な論文の構成	25
	「はじめに」・「本研究の目的」と	
	「従来の研究」・「研究史」との関係	26
	「はじめに」「本研究の目的」	26
	「従来の研究」「研究史」	28
	「調査地域の概要」「調査対象地域」「対象地域の選定」	29
	「調査方法」「分析方法」「調査・分析の手順」	30
	「結果」「調査結果」「集計結果」「結果と分析」	31
	「考察」「結果の考察」「結語」「むすび」「むすびにかえて」	32
VII.	引用と参考文献	33
1.	参考文献とは何か	33
2.	引用にあたっての注意	33
3.	本文中の記載方法	33
4.	ウェブサイト上の情報の引用とその方法	34
VIII.	文献検索について	36
1.	国士舘大学中央図書館へのアクセスと地理学図書の検索	36
2.	Webを利用した文献検索	37
3.	E-ジャーナル	39
4.	Webからの情報収集	39
5.	地図、空中写真などの閲覧・コピー	40
IX.	社会調査法について	42
1.	アンケート調査の計画	42
2.	質問紙の作製	44
3.	アンケート調査の実施	44
4.	データの集計・加工・解釈	44
付録1	地理学関連の専門雑誌一覧（国士舘大学図書館所蔵ぶん）	45
付録2	地理学関連の専門雑誌一覧（地理実習室所蔵ぶん）	49
付録3	地理学教室の教員による個人講読雑誌一覧	51
付録4	Web内部公開ぶん卒業論文タイトル一覧（2001～2011年度）	53

I. はじめに

国士舘大学文学部史学地理学科地理・環境専攻の学生が、学位を取得し卒業するためには、規定の単位数を修めるほか、卒業論文を提出し合格しなければならない。この卒業論文は4年次の1年間の成果というよりも、むしろ大学在学4年間の学業・研修の結晶というべきものであり、わずか数日・数週間の準備で書き上げ提出する授業のレポートとは内容的にも量的にも、また、準備に要する時間・労力においても比べものにならないものである。

卒業論文は、学生と指導教員との間の緊密な打ち合せの下に、学生自らが資料を収集し、組み立て、記述するもので、最終的な責任はすべて学生本人にある。したがって、その自覚を持って執筆すること。

以下に、地理学（および地理学と関連した環境分野）の論文作成の一般的手順を模式的に示した。これを見るとわかるとおり、1本の論文を仕上げるまでには、順序よくクリアしていかねばならない多くのハードルが存在し、それらを越えるためには様々な知識やテクニックを学び、アタマとカラダを使って努力する必要がある。当然、相当の時間を要するので、卒論に関わる時間をあとまわしにせず、つねに先へ先へと意欲的に進めていくことを勧める。参考までに、標準的な進行の目安を括弧内に記しておいた（むろん、これより早めに進行することが望ましい）。

1. 計画（3年次～4年次5月）

目的の設定←文献研究

↓

方法の決定←方法論の勉強

↓

綿密な研究計画＝論文構成（論文の骨子）の決定

2. 調査・分析（6月～9月）

データの収集：既製の調査データ、自力による調査、…

↓

データの集計・分析：図表の作成、単純統計、分布図、多変量解析、…

↓

結果の考察→結論へ到達

3. 本文の執筆（10月～11月）

下書き→添削→下書き→添削→……→添削→下書き→添削→清書

（必ず、何度も下書きと添削を繰り返す時間的余裕を取っておくこと。見直せば必ず何か不足の点が出てくる。あとは時間との戦いだ）

なお、計画、調査、分析、執筆に必要な、地理学方法論の概要、文献と情報検索、地図と統計の利用法、コンピュータとGIS、フィールドワークの方法などについてコンパクトにまとめられた本に『ジオ・パル 地理学便利帳』（海青社）がある。卒論執筆に際して必要

とされる基礎的な情報は、ほぼ網羅されていると言ってもよい。この本は1年次の「地域調査法」のテキストとして全員が持っているものであるから、これを有効に活用するとよい。

卒論を提出したことがそのまま合格を意味しないことはもちろんである。書き上げた論文は、2月上～中旬に行なわれる卒論審査（公開口頭試験）で合格できる内容でなければならず、本人にとっても十分満足のいくものでなければならない。

また、内容がいかにも優れていても、一定の形式を踏んで書かれたものでなければならず、この手引きに定める書式・体裁を踏まえていない論文や、ぞんざいな書き方の論文、誤字の多い論文は卒論審査において書き直し（不合格）となる場合があるので注意を要する。一冊の国語辞典を座右の友とすること。

辞書のほかに、文章のスタイル、引用のしかた、脚注、引用文献の書き方、研究の心構え等について参考となる出版物をいくつか挙げておくので、必要に応じて参照すること。

<論文の書き方についての参考文献>

河村 武(1969)： 投稿論文の図の書き方について、天気、16, 189-192.

保坂弘司(1978)： レポート・小論文・卒論の書き方、講談社（学術文庫）、247p.

田中義磨・田中 潔(1979)： 科学論文の書き方、裳華房、398p.

木下是雄(1981)： 理科系の作文技術、中央公論社（中公新書）、200p.

澤田明雄(1983)： 論文のトリック、講談社（学術文庫）、225p.

正井泰夫・小池一之 編(1994)： 卒論作成マニュアル、古今書院、214p.

浮田典良 編(1994)： 大学地理教育とレポート、古今書院、150p.

早稲田大学出版部 編(2000)： 卒論・ゼミ論の書き方、早稲田大学出版部、114p.

注) 参考文献の書き方については、VI. 引用と参考文献の項を参照のこと。

II. 卒論に関する基本事項

1. 「卒業論文」と「地理学演習1・2、3・4」

地理・環境専攻の学生は3年次において「地理学演習1・2」を、4年次において「地理学演習3・4」を登録し、2年間にわたり指導教員から卒論研究に関する具体的な指導を受けなければならない。各学生はこの授業を最大限に利用し、研究題目の設定から、調査のしかた、まとめ方、論文の書き方に至る細かい指示を受けること。

2年間におよぶ「地理学演習」の授業は、学生が卒論を書き上げるために教員から組織的な指導を受ける場であるから、出席と積極的な授業参加が不可欠である。また、「地理学演習1・2・3・4」（計4単位）は、「地理学野外実習A・B・C」（計6単位）や「卒業論文」（8単位）とは別の、独立した必修科目であるから、卒論が提出できても、地理学演習3または4で不合格となれば留年となるので注意を要する。

なお、4年次で「地理学演習3・4」を履修するためには、3年次で「地理学演習1・2」を履修済みでなければならない。「地理学演習1または2」が不合格のまま4年に進級しても、4年次で「地理学演習1・2」を同時に登録することはできず、卒論を提出することもできない。従って、「地理学演習1・2」の重要性を十分自覚して受講すること。

2. 書きおろしの禁止

卒論の内容は指導教員が十分掌握しているもので、「地理学演習1・2・3・4」の中において数回の発表を経たものでなければならない。したがって、指導教員が卒論の内容についてまったく了解していないような論文を書いてはならない。また、指導教員の承諾を得ずに卒論テーマを変更してはならない。

毎年提出期限間近になると、どの学生も時間に追われるのが常であるが、論文は下書きを作り、提出前に少なくとも一度は（必要に応じて複数回にわたり）指導教員に目を通してもらい、内容、図表のチェックを受けるべきである。

以上の注意を守らなかった卒業論文については、原則として「不合格」とするので、くれぐれも指導教員とよく相談しながら、論文を作成すること。

3. 論文の提出

1) 提出場所と方法

卒論は指定日時までに、審査指導料の納入票を添えて、文学部事務室へ持参して提出する。郵送による提出はできない。

2) 提出期限

12月10日、午後3時。卒論の受付は12月10日の1週間前から開始される。卒論の提出が少しでも遅れた場合、文学部便覧に記載された各項の該当者以外は、いかなる理由があっても受理されない。従って卒業が半年ないし1年延びることになる。

4. 公開口頭試験

卒論を受理された学生は、2月上～中旬に行なわれる口頭試験に臨み、これにパスしなければならない。この試験は一般公開で行なわれる。試験は卒論について10分間ほどの口頭発表と10分間ほどの質疑応答で行なわれる（正式な発表時間と質疑応答時間については各年のニューズレター等で知らされるので、それに従うこと）。質問は、副査、主査、他の教員の順で行なわれる。

学生は、卒論の要旨と図表で構成した発表用レジュメ（A3で2枚）を最低30部、自費で準備し、試験当日配布する（詳細はニューズレターを参照すること）。

いずれにしても、学生は口頭試験用に卒論のコピーを手元に残し、十分に目を通しておく必要がある。口頭試験での発表やレジュメの内容は、当然、提出された卒論の内容に即したものでなければならない。ただし、口頭試験での発表やレジュメに、卒論提出後に行った修正事項や追加事項を含めてもかまわない。

5. 卒論の評価

すべての公開口頭試験終了後、専攻教員全員の合議のもとで卒論評価が行なわれる。評価の段階では、次の各項目が総合的に検討される。

< 目的意識と論理性 >

- ① 研究目的の設定と研究史の中での位置づけ
- ② 目的・調査法・結果・考察・結論の整合性

< 独創性と努力の程度 >

- ① 研究の目的と結論および調査法における独創性
- ② データ取得（現地調査、資料発掘など）に費やした労力
- ③ データ処理・分析に費やした労力とその水準

< 論文作成の技術的側面：卒論の手引への準拠 >

- ① 章編成
- ② 文章表現
- ③ 引用と参考文献
- ④ 図表と本文との整合性

< 口頭試験 >

- ① 発表の準備
- ② 発表内容の明快さ

とくに、論文は自ら調べ、考え、表現した内容のオリジナリティーが重視されるものなので、既存の文献・資料等から引用する場合には十分な注意が必要である。引用にあたっての注意点（VI章）は卒論の評価ともおおいに関わるので、必ずよく読んで、この通りに従うこと。

提出された卒論は、以上に示した評価基準に基づいて採点され、論文の完成度によって特A・A・B・C・Dに振り分けられる。その評価のおおよその目安を次に示すので、論文作成前によく理解しておき、少なくともB（70点）以上のレベルを目標にして卒論を作成すること。

評価

内容についての評価の目安

特A（90点）	上記の諸点を概ね満たしており、国土舘大学地理学報告に多少の修正の上、投稿可能である。全国地理学専攻学生卒論発表大会で十分発表できる内容である。
A（80点）	細かい点で多少問題はあるが、目的意識・独創性（オリジナリティー）・努力の傾注度等において優れている。多少の修正をすれば全国地理学専攻学生卒論発表大会で発表可能である。
B（70点）	目的意識・独創性・努力の傾注度・論文の体裁等で完全ではないが、新たな資料の発掘や問題の指摘があり、今後の研究の参考になる部分が認められる。
C（60点）	学術論文を自ら作成しようという努力は認められるが、目的意識・独創性・努力の傾注度で問題が多い。論文の体裁にかなり問題がある。今後の研究の参考となる部分がほとんど無い。
D（不合格）	学術論文を自ら作成しようという努力がほとんど見られず、他人のアイデア・文章の丸写し、またはそれに近いもの。所定の文章・図表の分量に達していないもの。論文の体裁に問題が多いもの。口頭発表を無断で休む。または発表内容が支離滅裂である。

6. 卒論の保存・永久貸出し

優秀な卒論は、今後の参考用として地理学教室でスキャンし、教室のウェブサイトにて内部公開する。また、提出された卒論は、学位授与式の日学生本人に永久貸出しされる場合と、後の卒論指導のために担当教員の研究室にて保管される場合とがある。詳細は各ゼミの教員に問い合わせること。

Ⅲ. 論文の体裁

1. 論文の分量

量より内容であることはもちろんであるが、少なくとも2年間の努力の結果として期待される内容をこの手引きに従って記述した場合、目安としうる最低必要枚数が定められるであろう。400字詰め原稿用紙50枚（20,000字相当）以上とする。この規定は文学部全体で定められているものであり、例外は認められない。

ただし、自ら作成した図表の一部（全てではない！）については、原稿用紙50枚分の一部として認められる場合がある。いっぽう、既存の文献・資料・ウェブサイト等からそのまま引用した文章や文献・資料から複写した図表類は、原稿用紙50枚分には含まれない。

つまり、自ら作成した部分が400字詰め原稿用紙50枚分以上ないと不合格となるので、十分に注意すること。

2. 用紙

表紙には市販の書類綴用の黒色表紙（A4版）を使用する。本文その他については、原則としてワープロソフトを使用して卒論を書くこと。その際、書式は以下の通りにする。

用紙サイズ： A 4

マージン： 上4cm、下3cm、左4cm、右3cm

字数： 30行 × 30字

ページ位置： 右肩

文字の大きさ： 和文文字サイズで10.0～12.0程度のフォントを用いる

どうしても手書きで卒論を作成したい場合は、その旨を指導教員に申し出て、適切な指示を受けること。

3. 文章表現上の注意

文章は左から右へ横書きとし、句読点は1マス使う。パラグラフ（段落）の最初は1マスあける。句読点やカッコの受けなどの記号が文頭に来ないようにする。・・・など、日本語の文章作成に関する基本的ルールに必ず従って書く。こうした文章作法に明るくない場合は、作文や文章の書き方の参考書を前もって必ず読んでおくこと。文章作法上の誤りや不備は、減点の対象となる。

ワープロ・パソコンを使用する場合、禁則処理を行ない、漢字の変換ミスに充分気をつけること。

手書きの場合、一字一句丁寧に書き、誤字のないように気をつける。乱暴な走り書き、くずし字は許されない。行間に書き込んだり、線を引いて消すこともしてはならない。誤りは修正液を用いてきれいに消すこと。

文体は「です・ます」調（敬体）ではなく、「た・である」調（常体）を使う。両者を混

げて使うことのないよう特に注意すること。また、例に示すような回りくどい表現をしない。

例) 必要となったのである。 ⇒ 必要となった。
繰り返す結果となっているのである。 ⇒ 繰り返す結果となっている。

原則として敬語表現は使わない。また、くだけた口語表現も使わない。

例) 聞き取り調査をさせていただいた。 ⇒ 聞き取り調査を行った。
食ったんじゃないかと思う。 ⇒ 食べたのではないかと思う。
ダントツが多かった。 ⇒ 明らかに多かった。

なお、文中では「自分」のことは、一般に「筆者」または「著者」と称する。特殊な例外を除いて「私」「僕」などの一人称表現は使わない。

例) 自分で調べたところでは、 ⇒ 筆者が調査したところでは
僕が書いた。 ⇒ 筆者が書いた。

4. 数字・年号の記述

数量・年号等を示す数字はアラビア数字(1、2、3...)を使う。本文中で年号を示す場合、原則として西暦を用い、これで統一すること。西暦と元号を混ぜ合わせて使ってはならない。歴史的な記述を行うなどの必要から元号を用いる場合は、どちらかを主として他方をカッコ書きで併記すること。本文が西暦で、引用した図表が元号のままといった例もあるので自分で訂正しておくこと。自然科学の論文では元号を使う必然性は無い。

数量や西暦年を表す数字を表記する際は、必ず半角サイズを用いる。

例) 昭和45年 ⇒ 1970(昭和45)年 または 昭和45(1970)年
1 9 8 8 年 ⇒ 1988年
3 5 2 人 ⇒ 352人
二つの方法 ⇒ 二つの方法(数量ではないので漢数字のままでもよい)

5. 提出論文の構成

提出する卒論は次の順序で構成する。

表紙
中扉
要旨
目次
図表目次
本文
後記または謝辞(原則として必要ない)
注
参考文献

付録（原則として必要ない）

以上の順序で原稿を整理し、中扉（表紙の次にくる）から図表目次までの部分は小文字のローマ数字を用いて、i、ii、iii、iv...と右肩に打つ。ただし、中扉の i は美観の上から省略してもよい。

本文の部分（第 I 章、または、それに相当する章）からは、図表、参考文献まで、すべてアラビア数字で1、2、3、4...と、用紙の右肩に打つ。ページは1枚1ページとし、1、2、3 a、3b、4...などと打ってはならない。図表などに所定の用紙以外のものを用いる場合も、ページは右肩の部分に打つ。

以下に、それぞれの部分に関する注意事項を述べるので、必ずこれに従って提出する卒論の体裁を整えること。なお、本文と参考文献については、次の章以降で詳述する（なぜなら、複雑でとくに重要なので）。

1) 表紙

卒論の表紙には所定の黒厚紙製のものを用いる。白紙にワープロか太字のペン（サインペン）を用い、この手引きの中扉の要領で、卒論題目・専攻・学籍番号・氏名・指導教員名・提出年月日を横書きで記入し、表紙中央に糊貼りする。

なお、卒論の題目は、それぞれ3年次と4年次の前期中に専攻でまとめて事務室に提出する。卒論テーマを変更する場合、指導教員と充分協議した上でなければならない。

卒論の題目の付け方については、「IV. 卒論のテーマの建て方」を熟読すること。

2) 中扉

白紙に表紙の事項と同じものを記入する。

3) 要旨

研究の目的、方法、結果、考察の概要を800字以内に要約したものをつける。ここは、卒論を読む者が、まず目を通す重要な部分なので、いいかげんに書いてはいけない。時間の都合上あとまわしにしてギリギリに書いているような例が多く見うけられるが、「要旨」を読めば卒論の内容がほぼ理解できるように、無駄のない的確な表現を用い、じっくりと考えて書くこと。

4) 目次

内容を正しく表現する章・節・項の題名をつけ、ページを入れる。目次の作成は論文が完成し、ページをつけた後に行なうとよい。

5) 図表目次

本文中に出てくる図表のタイトルを、図、そして表ごとに列記し、その該当ページを記入する。

例)

図1 広島県の市町村と老人保健福祉圏域・・・・・・・・・・ 6

図2 東広島圏域6市町における高齢者福祉関連施設の整備状況・・・・・・・・ 15

～

表1 東広島圏域6市町の人口・・・・・・・・・・ 10

～

6) 後記 (または謝辞)

原則として必要ない。卒論の場合、本学の指導教員への謝辞は不要である。

ただし、現地調査で特定の人に多大な協力してもらった場合や、学外の特定の人物から研究を進める上での便宜を図ってもらった場合、および学外の研究者から指導を受けた場合は、謝辞を書くべきであろう。参考として文例をあげておく。

- ・本研究の現地調査においては、〇〇〇〇氏から多大なご助力をいただいた。ここに記して御礼申しあげる。
- ・本研究を進めるにあたっては、とくに資料収集の過程において、△△農業協同組合の〇〇〇〇氏には懇切丁寧にご協力していただいた。厚く御礼申しあげる次第である。
- ・本研究のテーマ選定や調査方法の決定にあたって、××博物館の〇〇〇〇学芸員からは、きわめて貴重なご助言・ご指導をいただいたほか、暖かい励ましの言葉をいただいた。厚く御礼いたします。

7) 注 (または脚注)

大学レベルの学識者であれば当然知っていると思われる事実について、いちいち注をつける必要はないが、疑問の生じるとと思われる記述には注(または脚注)での説明が必要である。注を打つ場合は、本文中の該当個所の右肩に右括弧付きで通し番号を付し、本文の後にまとめて、「注」として記す方法(『地理学評論』の方法)と、該当個所の原稿の最下部に「脚注」として記す方法(『人文地理』の方法)がある。

本文中で引用・言及した文献の出典は注には書かず、すべて最後の「参考文献」でリストアップする。

●注の打ち方の事例(森川 洋(2005)地理学評論78-7から抜粋)

(本文)

旧連邦州の市町村地域改革³⁾が実施された1960～1970年代には、各州の市町村地域改革の実施が報告されたし⁴⁾、その後も市町村制度の比較研究も行われたが⁵⁾、1990年代に実施された新連邦州の市町村地域改革をも含めた比較研究は、ドイツにおいても見当たらない。

(注)

3) ここで問題になるのは市町村合併だけでなく、市町村連合の形成も含まれる。しかし、市町村改革の概念には機構改革も含まれるので、市町村改革と呼ぶのが適当である。

- 4) Berichte zur deutschen Landeskunde, Bd. 47 (1973)をはじめ多くの雑誌に各州の市町村改革の進捗状況が報告されている。
- 5) Benzing et al. (1978) や Henkel (1987)、森川 (1988) のほか、学術書ではないが、市町村の実態をよく調査したものとして木佐 (1996) がある。

8) 付録

本文の説明上必要なものは正式な図表として載せるべきであるし、とくに必要でない図表はわざわざ載せる必要はないので、原則として不要である。

ただし、アンケート調査票、観測データ、地図など本文を読む上で参照する必要がある資料で、枚数、大きさ、量などの点からみて、どうしても図表として本文中には含められないものがあれば、あえて付録として巻末にとじ込むこともできる。もちろん、論文を書く上で使用した資料をすべてとじ込む必要はなく（むしろそれは望ましくない）、付録に含める資料は下の例のように、必ず本文中で言及していなければならない。

例) これらの条件を満たす全農家を対象として、アンケート調査（調査票は付録1として巻末に添付）を行った。

→この場合、実際に用いたアンケート調査票（未記入のもの）を1部（場合によっては縮小コピーして）添付する。

分析に使用したデータは、筆者が観測した8月1日から31日までの毎時観測データ（付録1として巻末に添付）である。

→この場合、分析の素データとなる気象観測結果の行列（例えばエクセル形式）の全てを添付する。

付録はそれぞれの物件毎に付録1、付録2...と続ける。本文から通しでページ番号を打つてはならない。

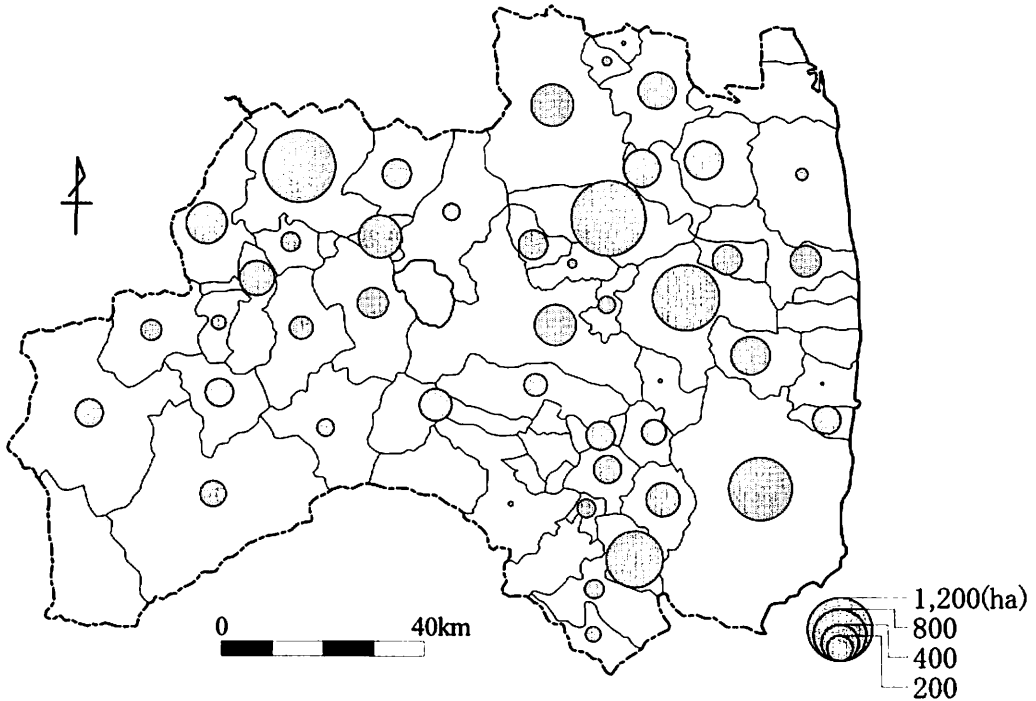
IV. 図・表・写真の体裁

1. 全般的説明

図・表・写真は本論を説明するのに必要かつ最小限の枚数で済ませ、単純明快なものであること。

「図」とは各種グラフ、地図などのように、情報の量・大きさ・位置・面的広がりをも点・線・面（模様）記号で表現したものであり、「表」は統計的数値や語句を行列として並べたものである。図と表を混同することのないよう注意すること。

参考のため、以下に図と表の見本を示す。いずれも出典は国土館大学地理学報告で、図は宮地忠幸（2011）、表は原田 隼（2009）によるもの（一部改変）である。



図* 市町村別の中山間地域等直接支払制度交付面積（2009年度：福島県）
資料：福島県農村振興課公表資料より作成。

表＊ マンガ喫茶の市場規模（2005年）

平均来店数	197.8人/店
平均利用時間	144.7分/人
基本料金	平均38分 475円/時
追加料金	400円/時
平均利用金額	1,021円/人
1店舗当たり平均利用金額	20万円/店・日 600万円/店・月 7,200万円/店・年
市場規模	1,971億円

日本複合カフェ協会(2005)：『複合カフェ白書2005』より作成。

1) 図・表・写真の番号と標題

図・表・写真はそれぞれ別々に通し番号をつける（例：図1、図2...、第1図、第2図...、表1、表2...、写真1、写真2...など）。図表を挿入する位置は、本文で初出の部分、または初出の次ページ付近とする。

標題は簡潔で、本文を読まなくても図表・写真の内容が十分わかるものであること。図および写真については、図の下の位置に番号と標題をつけること。表については、表の上の位置に番号と標題をつけること。

図・表・写真に通し番号や標題が欠落している場合、不完全な卒論として評価は落とされる。

2) 出典

学生本人が自分のデータを用いて作成したもの以外の、複写またはトレースした他人の図表は、すべて右下の空白に出典と年次を記す。

例) 出典：加藤(1999)

出典：相模原市(1978)

また、原図表を基に新たなデータを付け加えて作り直した場合でも、そのことを以下の例のように明記する。

例) 相模原市(1978)の原図に加筆修正

図表の出典についても、最後の「参考文献」に必ず含めることを忘れてはならない。写真についても他人の撮ったものは「誰々撮影(2001年)」と断わること。以上の処置を行わない論文は盗作(plagiarism)の罪を犯していることになるので注意すること。

ただし、図の出典を示す必要があるのは「主題図」を引用(またはそれに加筆)する場合

である。地形図や地図帳をトレースして作成した白地図や地域概要図などの「地図」や、それに自分で調査したデータを描き加えたような自らが作成した「主題図」に、「出典：国土地理院」や「出典：二宮書店（1999）詳細地図帳」といった出典を示す必要はない。とくに、後者の場合は「筆者作成」ということを明記する（自らの調査の結果が盛り込まれていることをアピールする）とよい。

「出典：国土地理院」などと表記する必要があるのは、国土地理院が作成した主題図などを直接引用（複写）する場合である。

3)本文中の記載方法

図・表・写真は必ず通し番号を用いて本文中で言及、説明されなければならない。

例) 第7図によれば～

～であることがわかる(表5)。

なお、本文中で言及、説明していない図・表・写真は不必要なものであるから、載せてはならない。

2. 図表

1)図表の質

図表は製図用ペン・レタリングセットなどを用いて丁寧に描くか、ワープロ、パソコンなどのプリンターで出力したものを貼付する。また効果的であれば色彩を施してもよい。

市販のインスタントレタリング、スクリーントーンは永久的なものではないので、これらを使用する場合、はがれないよう専用のコーティングスプレーをかけるか、またはコピーを取り、これを論文に貼付する。

表に使う統計は、信頼性が高く(例えば、国の指定統計や国の機関が公表しているもの)、最新のものを使用すること。

2)記号・凡例等

図表には、必要に応じて、使用した記号の凡例・方位・単位等をつけ、本文を読まなくても図表の意味が自明でなければならない。

3)調査地域の概略図と市販の地形図

小地域を扱う場合、そこが都道府県のどの辺に当たるのかがわかるよう、概略図の中に小縮尺の挿入図を入れるなどの工夫を要する。地形図をそのまま貼り込むことはせず、テーマに直接関係のある事項や地点のみを図上に描くなどの加工を施すこと。地図には縮尺(分数、またはパー縮尺)、方位、緯度・経度、あるいは平面直角座標系のx y座標値を必要とする場合が多い。

市販の地形図をベースマップとして、その上に自分で作業した結果を表現するのは構わないが、地形図そのものを切り貼りしたり付録として綴じ込んだりというようなことはしてはならない。官公庁・民間で編集・印刷された図表についても同様である。

4)標準寸法外の図表

図表は折らずに卒業論文に添付または綴じ込める寸法で作成するのが望ましいが、大きい図表を入れることが避けられない場合は、屏風折りにしてとじ込むか、折りたたんで中型の封筒に入れ、その封筒を巻末のページまたは裏表紙に糊付けする。この場合、図表および封筒の双方に、図表番号と標題を記す。本文中での言及のしかたは次のようにする。

例) 第5図(巻末)によれば～

3. 写真

写真は図として処理することもできるが、枚数が多い場合は、写真1、写真2などのように、独立した通し番号を打つ。写真番号のほか、写真の説明(標題)、撮影場所、撮影日時、撮影者(筆者本人の場合は不要)を必ずつけること。

写真そのものを原稿に糊付けするよりも、スキャン画像を用いる方が保存性がよい。

V. 卒論のテーマの建て方

1. 地理学（および地理学と関連した環境分野）の論文のテーマ＝目的とは？

あらゆる学術研究（論文）にはテーマ（目的）が存在し、なおかつそのテーマは学術的に意味のある（価値のある）ものでなければならない。したがって、卒論（地理学および地理学と関連した環境分野の論文）を作成するにあたって何よりもまず最初に行わなければならないのは、テーマを決定することである。しかし、地理学に関係していれば何でも論文のテーマとなり得るわけではなく、地理学的研究のテーマ（目的）となりうるものと、そうでないものが、はじめから存在している。この最初の段階で失敗しないためには、「どのようなものが地理学の論文なのか？」「何が地理学の研究として意味のあるテーマなのか？」についてしっかりと理解しておく必要がある。以下、その概略について述べるので、内容が理解できるまでよく読むように。

なお、以下ではおもに地理学での研究のあり方について論じている。しかし、本専攻は地理・環境専攻であるから、地理学と関係の深い範囲内において、一般的には狭義の地理学の領域には含まれないような環境分野のテーマを選択することも可能である。この場合の望ましいテーマ設定のあり方については個々の場合により状況が大きく異なるので、各人が指導教員と特によく相談した上で研究テーマを選定すること。

学問は、その性格（方法論）から「記述」を目的とするもの（いわゆるart）と「説明」を目的とするもの（いわゆるscience）に分かれる。「記述」（description）とは、「ある物事が何であり、いかにあるかを記載すること」であり、文学・歴史学・民俗学などは（多少の例外はあるが）これを研究の目的とする学問である。これに対し「説明」（explanation）とは「記述が事象の単なる確認であるのに対して、ある事象がなぜそうであるかという根拠を、法則をもって明らかにすること」であり、物理学・数学・医学・工学といったいわゆる自然科学、あるいは経済学・社会学などの学問では通常これを目的とする。

では、地理学は「記述」と「説明」のどちらを目的とする学問かというと、じつは単純には決められない。以下に述べるような歴史的な経緯から、地理学には「記述」を目的とする研究と「説明」を目的とする研究の両者が存在しているからである。そのあたりの事情を説明するためには、どうしても地理学の歴史を理解していなければならないのだが、いまそれをゆっくりと説明している余裕はないので、ここでは要点のみを述べることにする。

なお、この項（卒論テーマの建て方）については、1年生向けの『人文地理概説A』において、毎年4月の第1回から第3回の授業で詳しく説明しているので、しっかりと理解したい者は、その講義を受講するように。その旨を事前に担当教員に言ってもらえば、受講登録をしなくとも聴講を認める。

2. 地理学の歴史～二つの地理学の存在

地理学(Geography)という言葉を作り出したのはギリシア人である。ギリシア語で土地(ge)を記述する(graphein)という意味に由来する。古代ギリシアにはすでに、地理学上の二

つの基本的な視点の源流が存在していた。地域の地理的状況を記述する地域地理学（地誌）と、地球を全体的に考察しようとする一般地理学である。

中世以降になると、一般地理学は完全に衰退し、地理学の書物といえば、旅行記や探検記といった地球・地表面についての概略的・恣意的な記述が中心であったし、「地理上の大発見時代」とそれに続く15～18世紀においても、地理とは人々の好奇心を満たすための異国の物語にすぎなかった。

しかし、18世紀中頃から、科学的な地理学の確立を目指す革新運動がドイツを中心に起こった。いわゆる近代地理学の誕生である。その中心となったのが、近代地理学の父とも呼ばれるフンボルトとリッターであった。近代地理学がそれ以前の地理学とまったく異なる点は、地表に展開する多様な現象をそれぞれ独立して見るのではなく、現象相互の関連の中で理解し（例えば、気候と地形との関連、人文現象と気候・植生との結びつきなど）、その地域が世界全体の中で占める位置に注目したことである。そのためには客観性をもった正確な「観察」が不可欠であり、類似の現象が観察される他の地域あるいは他の時代との「比較」が重要な方法論となる。

19～20世紀前半の地理学は、この近代地理学が発展したものであり、いわゆる伝統的地理学として完成され、地理学の圧倒的な主流となった。その目的は、「地表の空間的多様性を観察して正確に記述する」こと、つまり地誌学的研究であり、その典型的な方法は、現地での綿密な観察と測定（例：露頭観察、気温測定、景観観察、聞き取り調査など）を行い、その結果をもとに精密な地図化（断面図、等温線図、土地利用図など）を行うことであった。

しかし、伝統的地理学が目指したものは広義の科学としての地理学ではあったが、その方法論はいわゆる科学（自然科学）のものではなかったため、20世紀に入って社会現象や人文現象に対しても科学的手法が導入され着実に成果を上げていく中で（その典型例は経済学・社会学・心理学である）、一部の地理学者は、従来の方法のままでは地理学の発展は望めないと考えはじめていた。

1953年、シェーファーは「地理学における例外主義——その方法論的吟味」という論文の中で、個々の地域の独自性を経験主義的に記述する伝統的地理学の研究方法を、一般的法則を追求する科学的方法には合致しないとして批判し、真の学問としての地理学の目的は、個々の事実の記述よりも、それらの事実が示す「パターン」を明らかにすることだと主張した。つまり、空間的諸関係についてのパターンこそ地理学の対象であり、追求すべきは個々の地域の「独自性」ではなく、空間的配置に関する「地理的法則」である、というのである。

この新しい地理学（ニュージオグラフィ）は、①計量的手法の導入と普及（計量主義）、②仮説検証的方法の導入（論理実証主義）、③空間的配置における規則性の解明と、それを生み出す空間的プロセスの追求の重視（空間主義）、という3点において、伝統的地理学とは根本的に方法論が異なっていた。こうした考え方は、1960代になると、いわゆる「地理学における計量革命」として、とくに自然地理学の諸分野や経済地理学・都市地理学の分野で多くの成果を生みだし、徐々に普及していくことになった。

3. 2種類の目的～記述と説明

以上簡単に述べた歴史的な経緯から、現代の地理学には、「記述」と「説明」という全く異なった目的と方法論を持つ、事実上2種類の地理学が存在している。したがって、地理学の論文を書こうとする者は、まず自分の論文（研究）が「記述」と「説明」のどちらを目的とするのかを意識的に決定し、よく理解していなければならない。

「説明」を目的とする地理学の論文（いわゆる科学論文）は、ほとんどの場合実証的研究の形式をとり、自然地理学や都市地理学・行動地理学のほか、経済地理学・社会地理学などのジャンルにも多く見られる。その研究の目的は因果関係の解明であり、具体的には、何が？（原因）、なぜ？（理由）、いかにして？（プロセス）といった疑問点について論文で明らかにしていくことになる。したがって、このタイプの論文には、最終的に証明することになる結論があらかじめ「仮説」というかたちで必ず存在し、この仮説を客観的に検証（証明）することが、論文の直接の「目的」となる。例えば、「北海道北部における複数の沖積面は、完新世後半の海水準の微変動と関連しながら形成された」という仮説、「どのような人がUターンし、どのような人がしないのかは、その人の経済的・社会的属性の違いによって決定される」という仮説、「遠山郷山地斜面の利用地名の分布は住民の環境認知を反映したものである」という仮説、といった具合である。

いっぽう「記述」を目的とする地理学の論文は、一般に地域地理学（地誌）・歴史地理学・民俗学的研究などのジャンルに見られ、その目的は事実関係の発見であり、どのようになっているか？（事実認識、現状把握）が論文で明らかにされる。

なお、事実認識や現状把握は科学研究の前段階（前提）であり、調査は研究の手段でもあるので、「説明」を最終目的とするいわゆる科学論文においても、例えば対象の現状把握や調査結果の報告のように、「記述」の部分を考察の前段階として含むことは多い。ただし、その場合も研究の最終目的は「説明」にあり、「記述」だけではいわゆる科学論文の目的にはならない。

ただし、既に述べたように、計量革命以降、現代地理学の主流は「科学」としての地理学のほうへシフトしてきたと思われるので、戦前のような純然たる「記述」で構成されたいわゆる「地誌」の論文は、少なくとも地理評・人文地理レベルの学術雑誌では、ほとんど姿を消したと言ってよい。

実際、計量革命以降では「記述」を中心とするいわゆる地域地理学の論文でも、ほとんどの場合実証的研究の形式をとることが多いので、論文全体の最終目的が現象の総合的「記述」であっても、現実には客観的データによる統計的方法を用いるなど、個々の事象の解釈の部分において「説明」的な考察を行う事例が多くなっている。また、近年研究例が増えている人文主義地理学（人文地理学とは違うので注意）のように、現象学や構造主義の方法論を用い、「記述」によって現象の「構造」を解釈しようと試みる方法もある。

このように、地理学の論文には「説明」を目的とする論文と「記述」を目的とする論文の2種類があり、そのいずれであるかによって、論文の書き方が相当に異なってくる。そこで、

まず必要になるのは、自分は地理学の中のどのような分野（ジャンル）で研究するつもりなのかを決定することである。例えば『地理学文献目録 第10集』目次を見ると、「1 地理学総論」から「32 紀行・随筆」まで32の大分類があり、さらにその下に小分類が設けられている。これは現在の地理学の中の分野を網羅したものと考えられるが、それぞれの分野によって、その分野独自の視点・方法論があるので、同じ研究対象を扱っても、それぞれアプローチの方法が異なってくる。例えば、同じ「千代田区神田に居住する高齢者」を扱うとしても、都市地理学の視点では「都市の因子生態研究」や「都心部の空洞化」あるいは「福祉施設の立地」、社会地理学の視点では「地域コミュニティと高齢化の問題」、経済地理学の視点では「高齢化による古書店あるいは出版・製本業の変容」、行動地理学の視点では「都心部に居住する高齢者の日常生活行動」といった具合に、それぞれ設定されるべきテーマ（目的）が異なり、それに伴って研究の方法も内容も全く異なってくる。

この地理学上の分野（ジャンル）と目的設定、および「説明」か「記述」か、についての具体的な事例を、「6. 学術論文の目的とジャンル：『地理学評論』『人文地理』の事例」として挙げたので、それらを参考にしてほしい。また、具体的な論文の目的の設定のしかた、それぞれのタイプによる論文構成の違いについては、「V. 本文の構成と内容：論文の書き方」の章を参照すること。

4. テーマ設定に際して注意すべき点

以上のことを踏まえた上で、卒論のテーマ設定に際して学生が陥りやすい問題点を列挙してみる。次の①～④については十分注意をして、テーマを設定した方がよい。

① 「記述」の論文を書くことは易しくない

一般に「説明」型の論文（科学論文）は難しく、「記述」型の論文は簡単だという、誤った考えが存在するようなので明記しておく。「記述」の論文を書くことは必ずしも易しくない。なぜなら、研究（論文）にとって最も重要なものはオリジナリティーなのであるが、「事実認識」や「現状把握」の内容はたいていの場合、これまでの研究や報告書によってすでに明らかにされているので、とおりの簡単な調査程度では、既存の地誌や調査報告書の内容を越えることはできないからである。

例えば、『サヘル地域の砂漠化』について「記述」しようとした場合、実際に現地へ行って膨大な量の資料収集を自力で行う（もちろん現地へ行きさえすれば誰でも研究成果を挙げられるわけではなく、その際、地域記述に必要な基礎的知識や調査の技術をマスターしておかなければ、結局何もできない）しかなく、それをしないで卒論を書こうとすると、日本で出版されているサヘル地域の砂漠化に関する書物（例えば講談社新書とかNHKブックスとか）を読んで、その内容を「写す」しか手はない。しかし、そのようにして書かれた「記述」の内容には、ひとかけらのオリジナリティーもなく、とても論文とは認められないことは、誰の目にも明白であろう。

それでも、自然地理学のテーマの場合、「記述」目的の論文がもともと少ないうえ、自然環境の記述に関しては既存の資料がそろっていないことが多いことから、例えば地形面の編

年、小地形分類、古気候の復元など、卒論レベルの「記述」でも、ある程度のオリジナリティーを保つことは可能である。

しかし、人文地理学のテーマの場合、地域の地誌を描くことはもちろん、「事実認識」や「現状把握」のみでオリジナリティーのある論文を書こうと思うと、相当の努力と忍耐を覚悟する必要がある。なぜなら、卒論レベルで学生が思いつきそうな一般的な人文現象に関しては、ほとんどの場合、行政機関や研究機関によってすでに調査・報告がなされているからである。例えば、『山形県のサクランボの生産』に関しては県農政部や農協に、『今治市のタオル工業』に関しては市役所産業課や生産組合に、『鶴見駅前商店街』に関しては商工会議所や商店組合に、『草津温泉の観光』に関しては町役場の観光課や観光協会に、それぞれ行って話を聞き、資料をもらえば、たいていの基本的な「事実認識」や「現状把握」はできてしまう。しかし、その内容を「記述」しただけでは、もちろんオリジナリティーは認められないのである。

② 問題設定が広範囲になりすぎないようにする

例えば、『日本の地形について』あるいは『都市の商業について』といったような大きなテーマを設定したとすると、通常、深い考察もできず、内容は浅薄となり、もはや論文とはいえない代物が作成されることになる。当然、『北海道の火山地形について』や『松山市の小売り商業について』のように、まずは研究対象を具体化する。しかし、おそらくこの程度の大きさのテーマでは、十分な学術論文に仕上げるために相当の時間と努力が必要となるので、卒論のテーマとしてわずか1年程度で完成させるのは不可能である。

したがって、さらに『北海道洞爺湖周辺のカルデラ地形について』や『松山市内の小売商店の立地特性』のようにテーマを絞り込む、さらには『北海道壮瞥町周辺に見られる火山性小起伏地形の編年について』や『松山市大街道商店街における小売業の集積過程と購買行動の変化』のように、具体的にテーマを設定するほうが望ましいだろう。一般に、テーマや研究対象を限定することによって、読まなければならない文献資料の量も少なくすむし、より正確で内容の濃いデータを収集する可能性も高まるし、なにより自分の考察をより時間をかけて深く掘り下げることができるからである。

③ 現実問題への提言や未来予測を論文の目的としない

例えば、「富士山の環境破壊をどうしたら止められるか」あるいは「駅前の放置自転車をなくすにはどうすべきか」「都心部の高齢化の問題点を明らかにする」といったような目的設定をし、結論として「入山者が各自ゴミを持ち帰るべきである」「市が無料駐輪場を作るべきである」「一人一人がもっとお年寄りを大切にしよう」などといった提言で終わる卒論を見かけるが、これは結論というより単なる筆者の意見・感想にすぎない。ゴミ持ち帰り運動や無料駐輪場を要求したいのであれば直接役所に訴えればよいことなのであって、わざわざ卒論で書く必要はない。

結論としてこうした常識的な提言しか出せないのであれば、はじめに戻って目的（テーマ設定）を変更すべきである。上の例の場合なら、「富士山の環境破壊における登山者の影響がどのように変化してきたか」、「どこに住むどのような目的の来訪者が駅前に自転車を放

置しているのか」、「都心部の高齢者の時空間行動パターンはどのようになっているか」といったように目的を変えれば、ずっと学術論文らしくなるし、論文も書きやすくなる。それでも、どうしても上記のような提言をする目的で論文を書きたいのであれば、厳密な環境アセスメントを行う、駐輪場と放置自転車のシミュレーションを行う、高齢者問題をうわべだけでなくもっと深く切り込む、など、問題に対する解答を単なる主観的な感想で終わらせないように努力する必要がある。それにはかなり専門的な知識や技術が必要であり、当然卒論の完成には相当の苦勞が要求される。

また、『戸越銀座商店街の現状と将来』『東京ウォーターフロントの今後』などというタイトル（目的）で、現状把握を行った後、安易に将来の状態を予測したり、勝手に今後の動向を決めつけたりする卒論があるが、その実体は往々にして官公庁の中長期計画や将来構想の受け売りであったり、自分勝手な根拠のない予測だったりすることが多い。そのような論文は学術的には無意味なので、よほどの専門的知識があり、シミュレーション・将来分析など確立された方法を用いて厳密な将来予測を行う場合以外は、こうした未来予測は目的とするべきではない。

④ 既存の研究の単なる「むし返し」にならないようにする

厳密な再調査や新たな視点を持った本格的な再調査を行う場合は別だが、これまでの研究によって「あたりまえ」になっていることを今さら追求しても、無意味である。研究には、必ず何らかのオリジナリティーが必要である。

5. 論文の題目

以上述べてきた手順に従い、卒論のテーマ（目的）を確定したうえで、論文の題目（タイトル）を付ける。題目は、その論文の内容全体を代表するいわば論文の顔ともいえるべき最重要部分なので、論文の内容を正確に表し、かつ簡潔に表現するもので、誰にでもわかるものでなければならない。当然、よく考えて付けるべきものであり、安易に名付けてはならない。題名が長くなるようであれば、副題を付ける。

現実の研究論文に見られる題目の付け方は千差万別なので、どのような題目にするかは、「地理学評論」「人文地理」「経済地理学年報」「地学雑誌」等の地理学関係の専門雑誌を参考にし、必ず指導教員の指示を受けること。なお、実証的な地理学論文の場合、研究対象地域を題目の中に明記しておくのが一般的である。研究対象地域は副題に書かれる場合も多い。以下に、望ましい書き方の例を示す。

例) 富士見町における高原野菜栽培と農協の役割について

⇒長野県諏訪郡富士見町における高原野菜栽培と農協の役割について

⇒高原野菜栽培と農協の役割について－長野県諏訪郡富士見町の事例－

静岡県静岡市における都市内居住地移動と通勤行動の変容について

⇒静岡市における都市内居住地移動と通勤行動の変容について

6. 学術論文の目的とジャンル：『地理学評論』『人文地理』の事例

ここまで読み進めてきた学生には、論文のテーマ設定（＝目的設定）がいかに重要であるか、理解できたことと思う。そこで、具体的な例として、実際の地理学の学術論文がどのようなテーマ設定で書かれているのかを示してみたい。

以下は、1990年度の『地理学評論』と2000年度の『人文地理』に掲載された学術論文を例にとって、それぞれの論文の目的（テーマ）が何であり、その目的が「記述」を目指すものか「説明」を目指すものかを、その論文の地理学上のジャンル（研究の方法＝アプローチと密接に関わる）とともに示したものである。これを見ると、最近の地理学において、どのような研究テーマがどの地理学のジャンルの中で、それぞれ具体的に何を目的として書かれているのかの一端を覗くことができる。これを見ながら、卒論のテーマを設定する際に、どのようなかたちで目的を設定したらよいのか、その際の論文の形式は「説明」を取るべきか、それとも「記述」を取るべきか、などの点について参考にしてほしい。

地理学評論(1990年度)

明治期以降の長野盆地における中心地システムの変容

目的：明治前期以降の長野盆地において、中心地システムがいかに発展・変化してきたかを解明する（説明）

ジャンル：都市地理学、歴史地理学

侵食輪廻説の歴史と日本の地形学への影響

目的：侵食輪廻説の歴史的展開と日本の地形学の対応を考える（展望＝記述）

ジャンル：地理学史

浅間火山北麓における耕境の拡大と農家の垂直的環境利用

目的：農家が標高差に伴って生じる自然環境の垂直的差異を、どのように活用して生産力の高い商業的農業を実現しているかを実証的に解明する（説明）

ジャンル：農業地理学

東北地方山岳地域における主要樹種垂直分布の上限、下限の温度領域と古気温の推定に有効な樹種

目的：①重回帰式によって山岳気温の推定式を作成し、その精度を確認する（説明）

②それに基づいて6樹種の上限・下限の温度領域を算出する（説明）

③それをもとに古気温の復元に有効な樹種について検討する（説明）

ジャンル：植生地理学、生態学、古気候学

北アルプスのカールにおける植物群落の分布と環境要因の関係

目的：①高山に分布している多様な地形がどのように環境要因に影響を与え、（説明）

②それによる環境の差がどのように高山植物の分布に影響を及ぼしているか、を明らかにする（説明）

ジャンル：植生地理学、寒冷地形学

紋別アイヌの家構成員の流動性

目的：アイヌの本拠地の固定性、および居住集団の構成員の流動性について、家のレベルで検討する（記述）

ジャンル：文化地理学、社会地理学

霞ヶ浦をめぐる住民運動に関する考察—都市化と環境保全運動—

目的：①住民運動は住民の社会経済的属性によると同時に居住地域の差によって説明されることを示す（説明）

②地域性の反映された住民運動が政策に影響を与え得ることを示す（説明）

ジャンル：社会地理学、都市地理学

札幌における認知地図の相対的歪み

目的：質問紙調査で捉えられる認知地図の空間的特性について、①認知地図の形成過程に関する概念的枠組みを提示する、②認知距離研究との統合が可能なことを示す、③認知地図がいかなる距離メトリックに基づいているかを検討する、④分析結果の一般化を図る（説明）

ジャンル：認知地理学、計量地理学

日高山脈北部における周氷河性斜面堆積物の数量的性質

目的：基盤岩質別の斜面堆積物の性質を数量的に明らかにすることによって、基盤岩質が斜面物質移動期や移動様式にどのように影響しているかを検討する（説明）

ジャンル：寒冷地形学、実験地形学

降水量の度数分布に見られる時間特性とその地域的・局地的特徴

目的：降水量の度数分布型の集計時間による変化に見られる地域的特徴を明らかにする（説明）

ジャンル：気候学

徳島県江川付近の地下水の温度と流動

目的：地下水温・地下水面分布などの新たな観測から、江川水温に関する以前の研究結果を再検討する（説明）

ジャンル：水文学（陸水学）

広域市町村圏と地域的都市システムの関係

目的：広域市町村圏の圏域と地域的都市システムとが各府県においてどのような対応関係にあるのかを明らかにする（説明）

ジャンル：都市地理学

日本列島における降水出現の日変化

目的：総観気候場ごとに出現する降水日変化の型とその分布を、体系的に明らかにする（説明）

ジャンル：気候学

日立鉱工業地域における産業地域社会の内部構造

目的：主力企業が主導して形成する産業地域社会の内部構造を解明し、その類型から産業地域社会の内部構造を模式化する（説明）

ジャンル：都市地理学、工業地理学

東北地方の山地地域における礫経変化に基づいた流路の区分

目的：河川の区間ごとの礫経変化を規定する要因について、河川の運搬力、支流からの礫の供給の両面から考察する（説明）

ジャンル：地形学

南大東島・北ムラにおけるサトウキビ収穫の機械化と農家経営

目的：①収穫の機械化が沖縄県離島部のサトウキビ作存続の鍵であるとされているが、それは本当か、②仮に収穫機械化の必要性が認められるとして、沖縄県離島部のサトウキビ作経営が確立しうる条件は十分に備わっているか、を明らかにする（説明）

ジャンル：農業地理学

十勝平野東部の段丘を解析する小流域の最終氷期以降の斜面発達

目的：①テフラを母材とした土層の層序およびその空間的広がりとの関係から一つの小流域を構成する谷壁斜面を編年し（記述）、

②最終氷期以降の斜面発達過程とそれに関与する気候変化の影響について検討する（説明）

ジャンル：寒冷地形学

19世紀前半にみられた東アジアにおける夏季の寒帯前線帯の南偏

①19世紀前半について、寒帯前線の日ごとの位置を復元し、その出現頻度から寒帯前線の季節による移動を復元する（記述）

②19世紀前半のアジアにおける夏季の乾湿と寒帯前線の位置との関係を明らかにする（説明）

ジャンル：古気候学

松島湾岸谷底平野における後期完新世海水準微変動の連続的復元

目的：江線の移動経路を年代的にも空間的にも連続的に追跡しうるように綿密に調査し、海水準微変動を高い精度で復元する（記述）

ジャンル：地形学（海水準変動）

広島市安佐南区の近郊農村における混住化の進行

目的：旧住民に関して農業経営形態と不動産経営の有無、新住民に関しては定住意志の有無と居住年数を指標として住民を区分し、住民属性と地域社会への住民参加との関連性を把握すると同時に、住民区分の指標の妥当性について検証する（説明）

ジャンル：農村地理学、社会地理学

東京都千代田区神田地区における人口減少に伴うコミュニティの変容

目的：人口減少に伴う都心地区におけるコミュニティの変容を、町会組織および居住施設の改変に伴う景観の変化から明らかにする（説明）

ジャンル：社会地理学、都市地理学

琵琶湖湖底の活構造と湖盆の変遷

目的：湖沼図・ユニブーム記録・エアガン記録の判読・深層ボーリングの成果などに基づき、湖底活断層の分布と性質、琵琶湖の傾動運動・現湖盆の変遷過程について考察（記述）

ジャンル：変動地形学

ニュージーランドのオークランド都市圏における農業的土地利用の変化とその地域的性格

目的：オークランド都市圏における農業的土地利用の変化を分析し、その土地利用変化の遷移システムと諸要因の有機的なつながりを明らかにする（説明）

ジャンル：農業地理学

長野県下諏訪町における既婚女性の就業に関する時間地理学的分析

目的：既婚女性の就業に関する時間地理学的アプローチの有効性を具体的に検討する（説明）

ジャンル：行動地理学（時間地理学）、社会地理学

赤石山地・三河高原南部の浸食小起伏面の性質と起源

目的：赤石山地と三河高原南部の小起伏面の性質や分布形態を比較検討することによって、従来の「山頂小起伏面＝隆起準平原遺物」説に対する新しい解釈を試みる（説明）

ジャンル：マス地形学

西ドイツ、ハンブルク周辺部、アルテス・ランドにおける果樹栽培の特質と存立基盤

目的：アルテス・ランドにおける果樹栽培農家の農業経営の特質を明らかにし（記述）、その存立基盤を明らかにする（説明）

ジャンル：農業地理学

人文地理(2000年度)

西大寺荘園絵図群と相論一文脈的アプローチを用いて－

- 目的：①西大寺荘園絵図群が互いにとってどのような文脈をなしたのかを明らかにする（記述）
②その結果に基づき、絵図群の中での相論絵図の役割を位置づける（説明）
③相論絵図が相論そのものに対していかなる文脈となったのか、を明らかにする（説明）
ジャンル：歴史地理学、人文主義地理学

過疎地域における従属的地域構造の形成過程と内生的住民組織の変容－長野県下伊那郡浪合村を事例に－

- 目的：①過疎地域の地域構造が従属的なものへと変質していくプロセスとその要因を明らかにする（記述・説明）
②過疎地域の内生的住民組織の実体を解明する（記述）
③内政的住民組織の変容過程における地方行政の役割について検討する（記述）
ジャンル：村落地理学、経済地理学

出稼ぎ者の移動行動と輩出構造－兵庫県浜坂町久斗山地区の事例－

- 目的：①出稼ぎ活動の分類を通してその特徴と変容を明らかにする（記述）
②出稼ぎ活動の空間的展開について明らかにする（説明）
ジャンル：行動地理学（時間地理学）、村落地理学

衛星写真を利用した渤海都城プランの研究

- 目的：渤海の都城システムと都城プランを復元する（記述）
ジャンル：歴史地理学、リモートセンシング

南北朝期長門国府の構造とその認識

- 目的：国府空間における諸集団の社会関係を分析し、中世国府の構造を明らかにする（記述・説明）
ジャンル：歴史地理学、人文主義地理学

1930年代におけるジェンダー化された空間－同潤会大塚女子アパート－

- 目的：「職業婦人」のために建設された場所がどのように構築されたのかを、ジェンダーの視点から明らかにする（記述・説明）
ジャンル：社会地理学、歴史地理学、人文主義地理学

明治期における酒造組合の形成と組織的変容－埼玉県を中心として－

- 目的：同業組合の広域化や地域的分化の原因と、組合機能の変容を明らかにする（記述）
ジャンル：工業地理学、歴史地理学

電気機械メーカーの事業所配置と地域的生産連関－ソニーグループを事例として－

- 目的：企業グループの空間行動を事業所配置と地域的生産連関から明らかにする（記述・説明）
ジャンル：経済地理学、都市地理学

中年シングル男性を疎外する場所

- 目的：①フェミニスト地理学の主張する「空間」が一部の男性をも疎外することを明らかにし（記述）、②その立場から「空間」の意味を明らかにする（説明）
ジャンル：社会地理学、人文主義地理学

VI. 本文の構成と内容：論文の書き方

1. 本文の章構成

本文の書き方は章編成とする。章はⅠ、Ⅱ、…、節は1.、2.、…、項は1)、2)、…とし、本文全体の整合性を保つ。章の番号・標題は新しいページから書き始め、1行目の左端に書く。

Ⅰ. ○○○○

1. △△△△

1) ××××

2) ……

2. ▲▲▲▲

1) ＊＊ ＊＊

2) ……

(章末になったら改頁)

Ⅱ. ◎◎◎◎

論文の章立て(章編成)をどのようにし、標題をどうつけるかは、原則として著者の自由であるが、論文の基本的な流れとして、「調査目的の設定⇒これまでの研究の流れの紹介⇒調査地域の設定⇒調査方法の説明⇒調査結果⇒考察⇒結論」といった構成をとるのが一般的である。

以下に、一般的な地理学の学術論文の構成について最低限のことを述べる。ただし、論文の書き方は、『地理学評論』や『人文地理』といった地理学の(メジャーな)学術雑誌に掲載された各種の論文を10本20本と読んでいるうちに、おのずと身についてくるものであるから、書き方がわからないと言う前に、どしどし論文を読むべきである。先人の優れた論文を読むことこそ、最善最良の「論文の書き方」の習得法である。また、分野によっては書き方が上に示した基本的な流れ(または以下の説明)とは異なっている方がよい場合もあるので、ゼミでの学習をよく踏まえて執筆すること。

2. 基本的な論文の構成

地理学の研究論文の場合、「説明」を目的とする論文と「記述」を目的とする論文で、その構成は多少異なってくる。

「説明」を目的とする論文の場合、一般に「はじめに(研究の目的)」→「従来の研究(研究史)」→「調査地域の概要」→「調査方法」→「結果(調査結果)」→「考察(結果の考察)」という一連の流れで論文を構成することが可能であり、またそれが一番読みやすい。

これに対し、「記述」を目的とする論文の場合、基本的な構成は同じなのだが、「結果」に相当する部分が論文のほとんどを占めることになるので、上の方法で章立てをすると、「結

果」の章だけが異様に膨れたバランスの悪い論文になってしまう。一般には、従来の研究・対象地域・研究方法などをまとめて「はじめに」の中で述べたり、「結果」の部分をテーマに沿っていくつか分割してそれぞれに適当な見出しを付けたりするなどの工夫がされていることが多い。

つまり、どのテーマの論文にでも共通するような、絶対的な決まりはない。

以下、各章立てについて、「説明」型の論文と「記述」型の論文に分けて、具体的にコメントしていく。

「はじめに」・「本研究の目的」と「従来の研究」・「研究史」との関係

「はじめに」や「本研究の目的」の章と、「従来の研究」や「研究史」の章は、当該分野に関するこれまでの主な研究を参照しつつ、研究の流れの中に自分の研究を位置づけて、「本研究はこれまでの一連の研究の中でどのような位置を占めるのか?」、「本研究の目的にはどのような意義があるのか?」といった点を明らかにする章である。したがって、これらの二つの章を両方とも書く場合、自ずとその内容には重なりが生じることになる。

本学の卒業論文では、一般の学術雑誌に掲載されている論文のように「従来の研究」や「研究史」に関する章の内容を「はじめに」に含めてしまってもかまわないし、別々の章に分けて記述してもかまわない。つまり、下のA（一般の学術雑誌の論文のように「はじめに」に研究史の概要を含める場合）もしくはB（「はじめに」と「従来の研究」の章を分けるパターン）のいずれかを選択すればよい。

< A >

- I. はじめに : 自分の研究テーマに関する研究の流れを簡潔にまとめつつ、本研究の目的とその意義を示す

< B >

- I. はじめに（本研究の目的） : 最重要の先行研究論文を数本程度以上引用する
II. 従来の研究（研究史） : 上の最重要先行研究論文を含めて記述する

ただし、上のB（2章に分けるパターン）を選択した場合でも、「はじめに」の章において自分の研究テーマに関する最重要の先行研究論文を数本程度以上、引用することになる。それは、もしもそのように書かないと、研究史の流れにおける当該研究の位置づけ（=なぜ、現段階でそのような研究をしたのか?）が明示されない、もしくは不明瞭にされる恐れがあるためである。

以下では、上記のA、Bのいずれのパターンを選んでも参考になるように、「はじめに」や「本研究の目的」および「従来の研究」や「研究史」の書き方について説明する。

「はじめに」「本研究の目的」

「はじめに」の書き方は一通りではないが、ここでは参考のため、「はじめに」の章の一

一般的な構成方法を示しておく。個々の論文のケースに応じた「はじめに」の具体的な書き方については、地理学評論等の学術雑誌に掲載された実際の「はじめに」の文章から、各自が学びとってほしい。

<「はじめに」の一般的な構成の仕方>

- まずは自分の研究テーマを含むある程度大きな研究課題の所在を提示し、その課題の研究史上の重要性（および社会的意義）を指摘する。
- その大きな課題について、これまでに示されている重要な研究（先行研究）の概要を示す。すなわち、その大きな課題に関してこれまでに何がわかっているのかについて、文献を引用しつつ簡潔に記述する。
- そのような研究の流れの中で、これまでにまだ十分に明らかにされていないが重要な意義のある特定の研究課題が残されていることを指摘する。
- そして、「本研究では、重要ではあるがこれまでにまだ十分には研究されていない（明らかにされていない）、〇〇〇の研究を行うこと（△△△を明らかにすること）を目的とする」ことを提示する。

このような「はじめに」の文章の中で、その結論である研究全体の目的を提示する文（目標規定文ともいう）が、最も重要である。この文は、研究全体を規定する文であり、論文全体の中でも最も重要な一文である。したがって、「はじめに」の章には、この目的を規定する文が必ず含められなければならない。そして、この文は、推敲に推敲を重ねた上で、一文字一文字まで厳密に書く必要がある。論文を読む人は、この文を読んで、その論文の概要を把握するためである。そこで以下では、この研究目的を規定する文の書き方について、やや詳しく述べておく。

「説明」型の論文の場合、科学論文としての目的、すなわちその研究（論文）において「何を説明するつもりなのか？」を明示する。科学論文において説明する対象は、多くの場合「仮説の検証」になるので、自分が証明していくつもりの「仮説」をはっきりと示さねばならない。例えば、「某河川の中流に大規模なダムが建設されたことにより、下流の三角州の形成が止まり海岸侵食が始まった」という仮説、「某地区では冬に風速10m以上の北西季節風が吹くときにヒートアイランドが発生しない」という仮説、「某大都市の都心地区では、地価の下落の結果、住居用高層マンションの建設が進み、若年人口が減少から増加に転じた」という仮説、「地下鉄の延伸と新駅の開設の結果、従来の都心への通勤流に加えて、それに逆行する新たな通勤流が発生した」という仮説など、さまざまな仮説が設定可能だが、いずれの場合も、その仮説が正しいことを証明することが論文の「目的」であり、それを客観的に証明していく過程そのものが論文の内容となる。したがって、この仮説自体が正しくない場合は、原則として論文そのものの意味がなくなってしまうので、仮説の設定には細心の注意を払う必要がある。そのために、そうした「仮説」が予測される理由、「仮説」を検証する学術的意味などについて、やはりハッキリと「はじめに」の中で明示しておかねばならない。同時に、テーマや調査対象を選定した理由、すなわち「なぜこのような目的にしたのか」、

「その目的は地理学的にどのような意味があるのか」といった点についても明示する。

「記述」型の論文の場合、論文としての目的、すなわちその研究（論文）において「何を記述するつもりなのか？」を明示する。もちろん、何でもかんでも記述すれば地理学の論文になるというわけではなく、「記述」によって明らかにすること、「何を明らかに描き出したいのか？」を筆者自身がよく理解していなくてはならない。例えば、「某地域の鋳物工業の就労構造をブラジル移民との関係から記述する」とか「某商店街が周辺地域に与えた影響を明治・大正期の文献を用いて歴史的に記述する」とか「某神社に伝わる伝統的民俗行事がどのような意味を持っているのか明らかにする」など。と同時に、その目的は地理学的に「記述」する意味のあるものでなければならぬ。地理学的に意味があるかどうか（論文のテーマとなるかどうか）は、従来の研究によって知ることができるので、まずはこれまでの同ジャンルの論文を読みあさることが大前提となる。こうした作業を経て、テーマや調査対象を選定した理由、すなわち「なぜこのような目的にしたのか」、「その目的は地理学的にどのような意味があるのか」といった点について、ハッキリと明示する。

このように、「説明」型であれ「記述」型であれ、論文の「目的」（テーマ）についてはよくよく事前に吟味する必要がある（詳細については「IV. 卒論のテーマの建て方」を参照）、そのためには過去の研究論文を多数レビューしておかなければならない。それを書く部分が、次の「従来の研究（研究史）」である。

「従来の研究」「研究史」

本学の卒業論文では、研究史の概略を示した「はじめに」の後に、改めて「従来の研究」または「研究史」をやや詳細に記述することができることになっている。これは、一般の学術論文では省略されている部分である（これを詳細に書いて一本の論文にまとめたものは、展望論文（レビュー論文）と呼ばれている）。この「従来の研究」や「研究史」の章においては、各人の論文のテーマに関連する過去の研究を総ざらいし、それぞれの論文の結果をふまえたうえで、自分の論文の「目的」となるテーマがどこに位置するのか、従来の研究史の上でどのような新しい発見を積み上げるのか、を明示する。したがって、この「従来の研究」の章は単に論文概要の羅列や紹介ではない。

過去のどのような論文とも関連性を持たない新しい研究というのは理論的にありえないので、「従来の研究」に書くべき先行の研究論文が1本もないということもあり得ない。「従来の研究」に書くことがないという場合、それはあなたが本来読んでおくべき論文を探さず、読まず、単に勉強をサボっていたということを証明するだけのことか、あるいは関連論文の対象を狭く設定しすぎている場合である。

例えば、「秋田市のなし生産」というテーマを直接とりあげた従来の研究はないこともある。ただし、「なし」に限定しても他の産地での研究は必ずあるし、果樹全般にまで対象を広げれば、その数は膨大なものになる。また、秋田市の農業さらには東北地方の農業の位置づけやその課題などに言及した論文も少なくないであろう。「秋田市のなし生産」を対象に何を明らかにするのか、目的によって関連する文献は変わってくるものであるから、目的の設定をキチンと行うことはここにも関係してくる。

さて、「従来の研究」や「研究史」の章では、基本的に、論文作成の過程で読んだすべての論文を、内容に従って整理し、記述する。その際、ここで取り上げた論文や書籍は、もれなく論文末尾の「参考文献表」に記載する。実際に読んでいない論文を記載することはもちろん、孫引き掲載（他人の論文や書籍に書いてある「従来の研究（研究史）」の一部または全部を引用すること）も、してはならないことである。

なお、戦前の文献にまでさかのぼって研究史をひもとく必要はほとんどない（ただし、研究史そのものが研究の目的である場合や歴史地理学の研究では必要な場合もある）。また、一般に調査報告書・データベースの類は、従来の研究で紹介する文献として適さない場合が多いので、それらを「従来の研究」の一部として記載する必要はない。

本文中での引用のしかたについては、「VI. 引用と参考文献」の項を参照のこと。

「調査地域の概要」「調査対象地域」「対象地域の選定」

論理実証型の論文の多くには、研究の対象地域（フィールド）が存在する。この章では、なぜそこを対象地域（調査地域）に選んだのか、その明確な理由づけを、まず明記する。対象地域の選定理由は、研究上本質的なものでなければならず、「出身地だから」とか「調査地が近いから」という理由は、学術レベルでは許容されないのを使ってはならない。研究目的をしっかりと設定し、従来の研究を注意深くたぐることによって、その研究（論文）にとって最適な対象地域（調査地）はどこなのか、どこでなければならぬのか、は必然的に決まってくるはずなので、その積極的な理由を書くのである。

対象地域の選定理由を書いたら、次にその対象地域の概要を書くことになるが、概してこの部分は、論文のページ数の水増しに使われているきらいがあるので、一言注意しておく。なぜ、「対象地域の概要」を論文の一部として書く必要があるのか、その理由をよく考えてみてほしい。

例えば、ほとんど人に知られていない山地の斜面をフィールド（調査地域）にする場合には、調査地域について必要十分な程度に記述しておく必要がある。このことは、ミクロなスケールで気温調査を行う、ある伝統的な商店街で聞き取り調査を行うなど、そのフィールドの位置的特性・基本的属性・これまでの歴史的な推移などについて普通の読者には知られていない情報が多く、とくにそうした基礎的な条件が調査結果や仮説検証の際に影響を及ぼすような場合には、同様に必要である。

その際、調査対象地域の概況について図を用いて説明することは、有効な方法である。小さな地域を扱う場合、そこが都道府県のどの辺に位置するかが分かるように地図に工夫する必要もあろう（「IV. 図・表・写真」の項を参照のこと）。

ただし、これは論文全体からみると、中心部分ではなく、あくまで「参考」の部分なので、必要以上のこと、とくに以後の論考において使わないこと、役に立たないことまでをも書いてはいけない。例えば、「銀座商店街」について論文を書くのに、必要もなく東京都の縄文時代からの歴史や、はては関東地方の気候などまで書く（よその本から書き写す）必要はまったくない。

また、誰もが知っているような、あまりにも概略的な記述（対象地域の属する県の人口や

面積など)も無用である。対象地域の地図として東京都の地図をでかでかと1ページぶんコピーして載せるなど、論外である。不必要な「調査地域の概要」の記述(多くの場合他の文献の引用)については、卒論の最小必要枚数には含めないばかりか、場合によっては減点の対象にするので、安易な記述をしないこと。

「説明」型の人文地理の論文の場合、例えばフィールドが東京23区とか仙台市とかいった誰もが知っているメジャーな地域である場合、「対象地域の選定理由」以外にはほとんど書くことはないので、次の「調査方法」の章の冒頭に入れたり、場合によっては前章の「従来の研究」の最後の部分に「本研究の位置づけ」とともに繰り返すこともある。

「記述」を主眼とする論文の場合、調査地域の概要からすでに結果の記述が始まっていることも多いので、気を抜くことはできない。論文の主要部(結果と考察)と密接な関連を意識しながら、対象地域について必要十分な記述を行う(当然、パンフレットや市町村要覧の単なる写しではダメである)。

「調査方法」「分析方法」「調査・分析の手順」

研究の目的(テーマの設定)と調査対象地域が決まれば、次のステップは裏付け資料(データ)の収集である。この章では、データを収集するために行なった様々な方法、そのデータを分析する手法について書く。結果の信頼性は、この「調査・分析方法」の内容いかんによって左右されるので、詳細かつ正確に記述する必要がある。

自然地理学および「説明」型の人文地理学の論文の場合、「データの入手」→「データの分析」→「結果」という一連の流れを明確にしておくことが絶対に必要なので、①調査目的 ②調査項目 ③調査対象 ④調査規模 ⑤調査時期 ⑥調査方法 ⑦分析方法、のそれぞれについて必ずすべて明記する。具体的には、野外観察・観測の方法、使用した器材とその信頼性や応答速度・誤差範囲、観測ルートや観測点の密度、観測日や季節の選定、統計的手法などを、もれなく書く。

また、国勢調査・農林業センサス・事業所統計などの既存のデータを分析に用いる場合はもちろん、役所や組合などから得た種々のデータを用いる場合、その資料の出所や正確な名称を明記しておく。現地調査を行った場合や、聞き取り調査やアンケート調査などの社会調査を行うなど自力でデータを収集した場合は、その実施方法・手順(上記の①~⑦)について必ず書いておく。社会調査を行った場合の書き方については、「IX. 社会調査法について」の項を参照すること。

また、結果の分析に、あまりなじみのない分析手法を用いる場合(例えば、地域傾向面分析・モンテカルロ法・数量化理論など)にも、その分析手法の説明をしておく。

「記述」型の人文地理学の論文の場合、調査そのものが論文の主題であることは少なく、精度の高い調査を行うことも少ないので、長々と書くべき内容がないなら、この部分は「はじめに」に入れるか、「結果」の冒頭に入れるかすることも多い。

ただし、役所や組合などから得た種々のデータを用いる場合、その資料の出所を明記するという点においては同様であり、現地調査を行った場合や、聞き取り調査やアンケート調査などの社会調査を行うなど、自力でデータを収集した場合は、その実施方法・手順(上記の

①～⑦)について必ず書いておく点も同様である。社会調査を行った場合の書き方については、IX. 社会調査法についての項を参照すること。

したがって、役場へ行って担当者から話を聞いて資料をもらっただけのことが論文の重要な結論部分になるようなことになると、この部分に書くことがなくなってしまう。そのときは正直に「人から教えてもらった（役場からの取材による）」と書くしかない。もちろん、それが重要な結論になるのでは、研究論文としてはふさわしくない。なお、役所の人や専門家から話を聞くことは「聞き取り」「取材」であり、注意が必要である。

なお、社会調査（聞き取り調査やアンケート調査）は一般に考えられている以上に専門的なテクニックを要し、いい加減な調査は論文に何の益ももたらさないだけでなく、調査主体（国士舘大学地理学教室）の風評をおとしめることとなるので、安易に行ってはならない。社会調査を行う予定の者は、『社会調査とデータ分析法』を必ず受講して、単位を得ておくこと。やむを得ない理由でこれらを受講せずに社会調査を行う者は、指導教員とよく話し合い、必ず綿密な指導を受けることを条件に実施すること。

「結果」「調査結果」「集計結果」「結果と分析」

「説明」型の科学論文の場合、学生自身が「調査」によってデータが得られたはずなので、その結果（ローデータ）をひとまず集計（単純集計）したり、図や表として表現したりして、そこから何か得られたことを述べてみるのは、常套手段である。

ただし、単に集計しただけではたいしたことは言えないし、そもそも論文の目的である「説明」の手段とはならないので、「分析」が必要になる。分析方法には、一覧表・単純グラフ化・地図化などの単純なものから、クロス表・相関グラフ化などの初歩的な統計分析、因子分析・重相関分析・クラスター分析などの高度な統計分析まで、多種多様なものが開発されている（その主要なものについては『社会調査とデータ分析法』と『計量地理学』で講義している）。いずれにせよ、論文の「目的」に沿って、最終的なゴールである「結論」を導くために必要な証拠を構築するための結果を、ここで提出する。

「記述」型の論文の場合、調査結果の記述そのものが研究の目的となるので、この「結果」の部分が論文の本体である。したがって、量的にもこの部分が全体の4分の3以上を占めることもざらなので、「結果」をいくつかの章に分割し、それぞれに適当な見出しを付けて書き下していく。ただし、何でもかんでも適当にだらだら書けばいいというわけでは決してないので、注意を要する。論文のテーマを完成させるにあたって、自身が現場で収集した膨大なデータを取捨選択し、整理し、必要十分な事項と言明を、過不足なく、矛盾なく、正しく理解しやすい順序と表現で、誰が読んでも理解可能のようにディスプレイし、問題点を明確に示し、一枚のタペストリを仕上げるように、こつこつと編み上げていく。具体的には、それぞれの目的に従って丹念に「結果の記述」を行うと同時に、その結果の検討、結果から帰納的に推理される相互関係（構造）の解釈、あるいは演繹的に導かれる因果関係の予測、などを、章ごと節ごとに適宜行うことになる。

要するに、この手の論文はテーマによって書き方（表現のしかた）は千差万別なので、同

じジャンル同じタイプの従来の研究論文を何本も熟読し、自力で「記述」のコツを会得するしかない。よって、書き方にこれといった順序や決まりはなく、筆者の自由に任されているが、この種の論文を書けるようになるためには、地理学的に対象を捉える鋭い観察眼が必要なことはもちろん、長編小説や2時間ドラマのシナリオが書けるくらいの構成力と論理性と文章力が絶対に不可欠なので、そのつもりで。「記述」型の論文を書くことが難しいというのは、オリジナル資料の収集がたいへんなことに加えて、その結果を上手に文章化する文章力が絶対的に要求されるからである。

「考察」「結果の考察」「結語」「むすび」「むすびにかえて」

「説明」型の科学論文の場合、前段で明らかにした分析結果を相互に関連させる、あるいはまとめることによって、「説明」を行い、仮説の検証（証明）を完了する。また、その結果を踏まえた「考察」によって新たな仮説を提起することもできるし、他の研究との整合性などを論じることもできる。

「記述」型の論文の場合、すでに述べたように「結果の記述」がすべてであることが多く、筆者の考える部分（いわゆる「考察」に相当する）は、「結果の記述」の中に適宜織り込まれることになるので、あえて「考察」の章を設けない論文も多い。体裁上、論文の最後に「結果の要約」とか「まとめ」とかをつける論文もある。

ただし、結果の全体像をもとに何らかの課題について検討・解釈・考察を加え、何か結論めいたことを述べるのであれば、それを「考察」として書くことも可能ではある。しかし、このように、はじめから考察すべき内容（結論）が明確になっているのならば、むしろ最後に考察するつもりの内容を「仮説」として設定し、それを「説明」する事を目的とする科学論文の形式をとった方が、一般に読みやすいし、論文の構成もしやすい。

また、いちばん最後に論文全体を振り返って、研究によって新たに生まれた疑問や調査の限界、今後の課題などについて指摘する場合もある。ただし、根拠のない将来予測や無責任な自治体への提言などといった、客観的な事実というより、むしろ感想に近いようなことは、あまり書くべきではない。無駄なことを書きすぎると、せっかくの論文が台無しになってしまう。

Ⅶ. 引用と参考文献

1. 参考文献とは何か

論文の最後にリストアップされる「参考文献」とは、本文中で引用または言及した文献のことで、それ以外の文献（本文中で言及していない文献）を参考文献として文献リストに載せてはならない。

逆の言い方をすれば、引用など他人のものを借用する場合は、必ず本文中でその出典を示し、最後に参考文献としてリストアップしなければならない。本文中で利用した他人の図表も必ず出典を示し、参考文献にリストアップすること（図表についての引用の詳細は次章を参照）。

ただし、地形図や空中写真、辞書や事典などを参考文献として書く必要はない。国勢調査報告や事業所統計などの「資料」や「データ」もふつう参考文献には載せない。

2. 引用にあたっての注意

論文は自ら調べ、考え、表現した内容のオリジナリティーが重視されるものなので、既存の文献・資料等から引用する場合には十分な注意が必要である。特に引用については卒論の評価ともおおいに関わるので、以下の三つの点については、必ずこの通りに従うこと。

- ① 量の多少を問わず既存の文献・資料等から引用する場合には、必ず後述の例にならって引用元を明記し、引用元の文献・資料等を文献リストに掲載すること。引用元を明記せずに引用した部分が多い場合は不合格となる。もちろん、図表類の引用についても同様である。
- ② 既存の文献・資料等から引用する部分の分量は、必要最小限とするべきである。仮に大量に引用したとしても、上述のとおり、その部分は卒論の必要最小枚数（400字詰め原稿用紙50枚分）には含めない。
- ③ 原文をそのままの形では引用しない場合でも、特定の文献・資料等に大きく依存して表現する場合には、必ずその旨を明記すること。

例) つぎに、調査地域の地質について、おもに〇〇（1995）を参考にしてとりまとめる。

3. 本文中の記載方法

本文中で出典に言及する場合、姓と発行年だけでよい。肩書、敬称（先生、博士、氏、嬢、女史、さん、Mr.、Mrs.等）はつけてはならない。

例) 野口(1965)によれば、～

東京には空がない(高村 1950)と言われているが、～。

～のためマルタ島の夏は非常に乾燥する(Strahler 1986)。

引用論文の著者が3名以上の場合、本文中では最初の著者名だけを用いて次の例のように

記述する。ただし、最後の「参考文献」にはすべての著者名を省略せずに記載する。

例) 長谷川等 (1995) によれば～。

～と言われている (長谷川他 1995)。

Hasegawa et al. (1995) によれば～。

「参考文献」のリストは著者 (個人の場合も団体・組織の場合もある) のアイウエオ順か、ABC順とする。記載事項は著 (編) 者、発行年、題名、(雑誌名) (本の場合、発行者名: 発行地)、ページがこの順で並ぶ。基本的には『地理学評論』での表記法を手本とするといふ。以下に、具体例を示す。

参考文献

青山高義・石渡千珠 1972. 熱帯における雲量分布の季節変化について. 地学雑誌 181: 15-20.

尾留川正平 1970. 関東地方の土地利用. 朝香幸雄ほか編『日本地誌のミナモト』65-79. 大明堂.

菅野峰明 1984. アメリカ合衆国の自動車工業と都市. 地理29(9): 30-38.

関口 武 1965. 台風時の日本の雨量. 地理学評論34: 430-437.

Johnston, R. J., Gregory, D., and Smith, D. M. eds. 1994. The dictionary of human geography, 3rd ed. Oxford:Blackwell Publishers.

Woodcock, A.H. 1974. Permafrost and Climatology of a Hawaii Volcano Crater. Arctic and Alpine Research 6: 49-62.

4. ウェブサイト上の情報の引用とその方法

ウェブサイト上の情報には、印刷公表された文献情報と比べると、次のような短所がある。

- ・更新されやすいため後々その内容を把握しにくい。
- ・情報によっては信頼性が低い。

そのため、卒業論文を作成するにあたっては、必要な情報について、できる限り、将来にもその情報を再び確認することができるような出版物から引用することが望ましい。

とはいえ、昨今ではウェブサイト上にも論文作成に有用な情報が数多く存在しており、その中には信頼性の高いものや、公的機関等によって今後の長い期間にわたって再確認が可能であると予想される情報も少なくない。このようなウェブサイト上の情報を引用する場合は、参考文献リストの後に、アドレスがアルファベット順になるように並べた「引用したウェブサイトの一覧」のリストを掲載すること。

このリストに掲載する項目は、次の4点とする。

- (1) サイトのアドレス
- (2) サイトを閲覧した年月日
- (3) サイトの名称
- (4) サイトの作成者

(リストの記載例)

引用したウェブサイトの一覧

http://riodb02.ibase.aist.go.jp/db084/download_data.html

2008年1月20日. 東日本地域の画像ファイル詳細版, 20万分の1日本シームレス地質図データベース. 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター.

http://www.tokyo-jma.go.jp/sub_index/tokyo/kikou/index.html

2008年1月20日. 東京都の統計資料, 東京管区気象台ホームページ. 気象庁東京管区気象台.

なお、「国士舘大学地理学報告」掲載論文のように、印刷公表されている学術情報がインターネット上でも入手可能で、実際にそれをウェブサイトから入手したとしても、その場合は通常の印刷物として参考文献リストに掲載すればよい。


また、本文中や図表中でウェブサイトを引用するにあたっては、「引用したウェブサイトの一覧」に掲載する内容と1対1に対応するよう表記することが重要である。

VIII. 文献検索について

ここでは、インターネットを使った最新情報の収集方法を中心に、その周辺の情報収集のしかたも含めて説明しよう。ただし、情報源のURLはしばしば変わることがあり、ここで紹介するURLも1年後にはそのいくつかが変わってしまっている可能性があるので注意を要する。そのような場合には、インターネット（以下 Webと記す）を使った検索システムで探し出せばよい。

1. 国士館大学中央図書館へのアクセスと地理学図書の検索

中央図書館のウェブサイトから「学術情報リポジトリ」（下図）を使うと、図書館所蔵の図書、雑誌の検索ができる。また、国会図書館、世田谷区内の六大学を初めとする学外のデータベースの情報も検索できる。文献を探す際には、最初にこれらのデータベースを使ってみると良い。また、大学図書館の検索システムは、イギリスのBRITISH LIBRARYの


本館 (3332) 電話 (03)5481-1111

学術情報リポジトリ トップ画面 ヘルプ

Libkissへようこそ
 国士館大学図書館は、本学の学術情報をLibkissで公開しています。

フリーワード: _____ 検索 クリア

ユーザ名	検索対象データベース	検索対象ウェブサイト
パスワード	<input checked="" type="checkbox"/> データベース <input checked="" type="checkbox"/> 用語/Q&A <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> その他 <input type="checkbox"/> www <input type="checkbox"/> 学内	国士館大学 国会図書館 国会図書館(特設) NACSIS EL google

★一部の公開資料を閲覧するには、ユーザ名とパスワードを入力してログインする必要があります。ユーザ名とパスワードが不明な方は、ask@libkiss.kansai-u.ac.jp (TEL: 03-5481-6841) までお問い合わせ下さい。

Libkiss Knowledge
 日本大目録会館、国代用語の取組知識、日本人名大辞典、プロダクション美術辞典など各種の辞書等を中心に、国刊エッセイといった記事やコラムなど様々な情報源を検索できます。

国士館大学OPAC(国士館)
 国士館女子大学、国士館大学、東京都立大学、成城大学、東京農業大学、国士館大学など世田谷区6大学コンソーシアム国士館大学OPACの検索機能が使えます。

国会図書館OPAC(国会図書館)
 国会の学術情報基盤国士館大学(本学を含む)の学術リポジトリ検索システムです。

国会図書館(特設)
 国会図書館の「特設」検索システムです。

NACSIS
 第一法規の「特設」検索システムです。

EL
 第一法規の「特設」検索システムです。

google
 第一法規の「特設」検索システムです。

国士館大学OPAC(国士館)
 国士館女子大学、国士館大学、東京都立大学、成城大学、東京農業大学、国士館大学など世田谷区6大学コンソーシアム国士館大学OPACの検索機能が使えます。

国会図書館OPAC(国会図書館)
 国会の学術情報基盤国士館大学(本学を含む)の学術リポジトリ検索システムです。

国会図書館(特設)
 国会図書館の「特設」検索システムです。

NACSIS
 第一法規の「特設」検索システムです。

EL
 第一法規の「特設」検索システムです。

google
 第一法規の「特設」検索システムです。

データベースにつながっている。このBLというデータベース（学術リポジトリの検索対象サイトのリスト下方にある）で検索したものは、航空便やWeb経由で入手できる（日本語の文献も）。学生は検索しかできないので、どうしても必要な場合は教員に頼んでみよう。

検索システムの利用にあたっては、図書館内部の端末のほかに、Webが利用できるあらゆる環境で使用できる。利用に際して手続きなど不要で、各フロアの空いている端末や研究室、自宅のPCを使えばよい。ただし、「日経BP記事検索サイト」などは学外からはアクセスできない。

本学図書館に無い図書の場合、大学間の協定で貸し出せる制度がある。この場合、雑誌名、巻、号、ページ、論文タイトルなどの情報を提示して本学図書館の受付で所定の手続きをすれば、他大学の図書館からコピーしてもらえる。ただし、一つの論文コピーを取り寄せる場合でも、それなりの金額と日数がかかる（500～600円程度）。論文等をその日に入手したい場合は、当該する大学の図書館や国会図書館などへ出向く必要がある。

国会館大生は国会図書館も近く、そこに行けばたいの図書・雑誌を入手できる。しかし、国会図書館は閉架型のため、まず文献を手にするのに時間がかかるし、それをコピーするにはさらに時間がかかる。国会図書館を利用する場合はこのことを覚悟しておこう。また、大学生は、自分の大学の図書館の紹介があれば他大学の図書館も利用できるので、利用してみよう。とくに、世田谷付近の大学は、図書館相互利用の協定を結んでいるので、利用しやすい。

自分が求めている図書が本学図書館にあるか、またいずれの図書館にあるかは、上記の検索システムを使うと瞬時に分かる。それでは、近年出版された地理学関連図書にはどのようなものがあって、どこの出版社で発行されており、そのうち本学図書館や研究室の図書資料室に配架されているのはどれかを知りたい場合、どうしたらよいか。また、「富士山」という言葉がタイトルに入っている書名はどのくらい出版されていて、それらの出版社名や金額を知りたいという場合、どうしたらよいか。基本的には、学術リポジトリから国会図書館のデータベースを使えばよい。また、金額も知りたい場合は、書店のデータベースも利用できる。代表的なものとして、アマゾン、紀伊国屋書店、丸善など書籍購入のためのデータベースが利用できる。これらのURLは、サーチエンジンで簡単に検索できる。なおこのほか、地理学研究室では、地理学文献目録（第10集以降はCD-ROM版もあり）を所蔵している。

2. Webを利用した文献検索

文献検索の話になると、担当教員は「インターネット（Web）ばかりに頼るな」というかもしれない。しかし、まずはWebで文献検索するのがいちばん手っ取り早い。ただし、複数の検索方法を知らないと、「インターネット（Web）で手に入る論文などたかがしれている」ということになる。日本でも最近では古い文献やデータベースをWebで公開し、論文をダウンロードできるようにしていることも多い。既刊の文献目録に載っていない論文や、国会図書館でも探し出しにくい文献を比較的簡単に入手できることが多いのもWebによる検

索の特徴である。

下図は、地理学教室のホームページにある、地理・環境関連リンクのページである。ここには、「CiNii 論文情報ナビゲータ」、「なかよし論文データベース」、「農業情報資源システム」、「Google Scholar」¹⁾、「学術研究データベース・リポジトリ」、「地質文献データベース」、「地質調査研究報告（旧地質調査所月報）」、「国土地理院時報」など、学生の利用が多い代表的な論文検索データベースだけをのせてある。これ以外にも、それぞれの分野（例えば地理情報システムや農業気象ほか）ごとにデータベースがある。

文献検索	
国士館大学図書館 学術情報リポジトリ	http://libw01.kokushikan.ac.jp/
国士館大学図書館 電子ジャーナルへのリンクページ	http://libw01.kokushikan.ac.jp/
CiNii 論文情報ナビゲータ	http://ci.nii.ac.jp/
Journal Archive	http://www.journalarchive.ist.go.jp/japanease/tee_la.php
J-STAGE	http://www.jstage.ist.go.jp/browse/~char/ia
なかよし論文データベース	http://staff.ist.go.jp/miyagi/iso14000/Works/Review/comp/goode.html
農業情報資源システム	http://rma1.aesearch.asnococta.afrc.go.jp/contents/JASI/index.html
Google Scholar	http://scholar.google.com/
Google ブック検索	http://books.google.co.jp/books
学術研究データベース・リポジトリ	http://dbw01.ac.jp/info/ib/meta/Csv.Default.aspx?DEF_XSL_sdefault&GBP_ID=60000008&DB_ID=60000008&IDAN&IS_TYPE=csv&IS_STYL=Escdefault
地質文献データベース	http://rod02.libbase.ist.go.jp/D011/index.html
地質調査研究報告（旧地質調査所月報）	http://www.gsi.go.jp/Pub/Bull_new/index_ja.html
地質ニュースpdf	http://www.gsi.go.jp/Pub/News/jn/index/
国会図書館データベース・ナビゲーション・サービス	http://dnv1.ndl.go.jp/bnrv.serv/ist/bnrv_user_tool.jsp

そして、これらのデータベースで検索し、直接pdf形式の論文をダウンロードできる場合も多い。また、ロボット検索のGoogleでは、検索オプションで、ファイル形式を pdf と指定して検索するだけで、Web上の論文を検索し、論文や資料そのものをダウンロードできる（後述のE-ジャーナルと同様）。これらは、大学の紀要や研究機関の機関誌、官公庁の文書などが多い。「国士館大学地理学報告」や国士館大学文学部の「国士館人文学（人文学会紀要）」もこのようなものの一つである。また、国立情報学研究所 学協会情報発信サービス（<http://www.soc.nii.ac.jp/>）では、分野別の学会誌を探しだし、バックナンバーの目次を一覧できるものも少なくない。

なお、これらWeb上のデータベースも、単一のキーワードで検索できる論文には限界がある。複数のキーワードを組み合わせて検索しなければ、期待したような結果は得られないと思った方がよい²⁾。また、それなりの独自のノウハウを自分で開発して経験を積まなければ良い成果が得られない。そのようなノウハウを知らないと「インターネット（Web）ばかりに頼るな」という発言につながることもあるかもしれない。もちろん、このような発言もまた真実であるけれど。

1) Google Scholar（グーグル スコラ）：学術論文や会議資料、学位論文などを検索できるサービス。

Google Scholarは、有料データベースにアクセスできない人でも使用できるので便利だ。

2) 検索のオプション：プラス検索、マイナス検索、AND OR 検索など、サーチエンジンに応じた使い方がある。大部分は、サーチエンジンの「使用方法」の項目をみればわかるようになっている。

3. E-ジャーナル

E-journal（電子ジャーナル）とは、雑誌論文の本文・図表などを電子化して、コンピュータのディスプレイ上で読めるようにしたものである。日本語の地理学関係のものとして、日本地理学会の E-Journal GEO や東京地学協会の地学雑誌の Electronic Journal などが代表的なものだ。現在、国内外の学会誌が、無料で学会誌の論文をダウンロードできるこのようなE-ジャーナルをつくりつつある。ただし、学会誌の販売を出版社が請け負っている場合は、出版社の有料サイトへゆくか、大学図書館経由で出版社のサイトへ行かなければならない。国士舘大学もいくつかの外国出版社と契約しており（EBSCO A-to-Z、Oxford University Press、Wiley Inter Science、Blackwell Synergy）、数百の学術誌のデータベースにつながる。そして、これらから無料で論文をダウンロードできる。大きな大学では、20,000件程度の学術誌と契約しているが、国士舘大学でも近いうちにそのような環境になるだろう。

なお、これらのE-ジャーナルでは、バックナンバーも検索・ダウンロードができるが、歴史の古い雑誌でも現在のところ20年程前のものまでしか整備されていないことが多いようである。しかし、バックナンバーに関しても今後は急速に整備が進むであろう。

4. Webからの情報収集

Web（インターネット）検索には、検索エンジン（サーチエンジン）という仕組みを使う。検索エンジンには、大きく「ディレクトリ型」と「ロボット検索型」の二種類に分けられる。ディレクトリ型は、URLが分野ごとに整理されていて、カテゴリを参照しながら徐々に対象を絞り込んでゆく。代表的なものに、Yahoo (<http://www.yahoo.co.jp/>) の基本システムがある。このタイプの検索エンジンは、人間が手間をかけて登録し構築したものだ。ディレクトリ型の利点は、簡単な紹介文を見ることができし、人手で構築されるので、登録されているホームページの内容が一般に精選されているということである。

いっぽう、ロボット型の検索エンジンは、「ロボット」とよばれるプログラムが、一定間隔で世界中のホームページへアクセスし、情報を自動的に収集したシステムのことをいう。ディレクトリ型とは比較にならないほど膨大なデータが登録され参照できるが、目的のホームページ（サイト）へたどり着くにはテクニックが要求される。ロボット型の代表的な例として、Google (<http://www.google.co.jp>) がある。

● 地方自治体の情報は、「全国自治体マップ検索」などがある。最近では大部分の都道府県、市町村がホームページを持っているので、「県政、市政、町政、村政要覧」に掲載されている類の統計情報ならたいはいは入手できる。これらは、Excel形式のファイルで提供されることが多いので非常に便利である。また、自治体の組織図なども掲載されているので、役場を訪ねる前の予備情報の収集に使うと良い。また、役場のホームページからは、地域のさまざまなホームページへリンクされていることも多い。

● 官公庁・政府機関・政府刊行物へのアクセス

政府機関、研究機関は、機関名でグーグルなどを検索すれば、大抵の機関に行き着く。その中で、総務省統計局・統計センター (<http://www.stat.go.jp/>) では、総務省が実施する各種統計調査の結果が掲載されている。また、各官公庁の統計情報へも、このページからアクセスすることが可能である。しかも、近年のものに関しては Excelデータとして直接ダウンロードできる。

また、地理関係では国土地理院や地質調査所などのサイトに役立つ情報がある。地方の博物館などへアクセスすることも、情報収集の上で有用だ。これらのアドレスはサーチエンジンで見つけ出すことができる。

政府刊行物は (<http://www.gov-book.or.jp/>) で目録をみるできるので、都心の大きな本屋や政府刊行物センターへ出向かなくても済む。ただし、慣れないうちは実際に現物を見に行った方が、はるかに必要な文献を判断しやすい。

● 新聞記事の検索

新聞記事を検索して記事にアクセスする場合、たいてい有料になる。ただ、大学図書館には、CD-ROMやネットに対応した検索システムが用意されている。新聞社によって異なるが、20～30年分以上の全記事が検索対象になる。

自宅から検索する場合は、有料の会員登録をしなければならない。それぞれのシステムで検索方法が異なるが、多くは利用者が想定した任意のキーワードを組み合わせて検索できる。また、新聞社によっては、無料で主要な掲載記事を検索できることがある。主要な記事とは、その新聞社のホームページに出た記事のことが多い。

5. 地図、空中写真などの閲覧・コピー

国土地理院や日本地図センターのウェブサイトでは、全国の1/2.5万地形図の閲覧サービスがあり、それぞれ独自に（別のシステムで）おこなわれている。また、全国のカラー空中写真の閲覧とダウンロードも、国交省のサイトで試験運用が始まった。これらのURLは、地理学教室のホームページからリンクされている。

過去に出版された地形図、地図や地質図、植生図などは国会図書館の地図室で閲覧できるし、Webで閲覧できる。ただ、著作権などの関係で全ての図版がWebで公開されているわけではないし、図書館で複写（コピー）する場合も何回かに分けなければ複写してもらえないこともある。全国で刊行された地形図の履歴（図歴という）は、国土地理院のサイトで公開されている。

なお、古い時代の地形図は、関東地方測量部（九段南1-1-15 九段第2合同庁舎9F）にて有料複写できる。ここでは一枚丸ごとの複写が可能であり、全国の空中写真も無料で閲覧できる。空中写真は主要な年度しか揃っていないので、経時変化の抽出などの作業はできないが、作業スペースも用意されているので、多量の写真を購入できないときにはここを使うと良い。

社団法人全国国土調査協会 (<http://www.zen-kyo.or.jp/>) では、全国で行われた国土調

査の資料を有料で借り出すことができる。1/5万地形図単位で、地形分類図、表層地質図、土壌図、起伏量図などがセットになっている。

国会図書館は国会議事堂の近くにある。陸地測量部や国土庁の合同庁舎内は上記住所を手がかりに自分で調べてみよう。

なお、外国で刊行された官製地形図などは、テキサス大学図書館などで目録や一覧図を検索できる (<http://www.lib.utexas.edu/>)。場合によっては、画像データが公開されている場合もある。また、世界各国の地形図をデータで購入できるサイトもある。これらの情報は頻繁に変わるので、教員（長谷川）や大学院生に情報を教えてもらえばよい。

IX. 社会調査法について

聞き取り調査やアンケート調査は、多大の時間と労力を要する調査であり、他にすることもないからとか、ネタに詰まったからとか、とにかく卒論のページ数を増やすためなどという、いいかげんな気持ちで手を出すものではない。(これはどんな調査にもいえることだが) いい加減な調査や不備な調査によって得られたデータは「嘘っぱち」のデータであり、全く使いものにならない。それどころか、ウソのデータに基づく結果も考察もすべて「ウソ」なので、結果として論文全体が意味のないものになってしまう。ところが、どんないい加減なアンケート結果でも、なまじデータの形をしているため、これをしらじらしい顔をして卒論に使う者がいるので、よけい始末が悪い。

ちなみにアンケート調査と聞き取り調査は、ともに「社会調査法」(図書館では多くの場合、統計学または社会学・心理学の棚に置かれている)と呼ばれるデータ収集の方法の一種であり、方法的に共通する部分が多い。以下、卒論でアンケート調査を行う場合に必ず従わねばならない手順について述べるが、聞き取り調査の場合もほぼ同じような手順が必要となる。また、これらはあくまで**注意点**であり、アンケート調査の方法を書いたものではない(そんなことわずかに数ページで語り尽くせるわけがない)。社会調査の詳細については『社会調査とデータ分析法』において講義するので、必要な者はこの講義を受講し単位を取得すること。と同時に、アンケート調査・聞き取り調査はたいへんな熟練を要する調査であるから、初心者には専門の知識を持った者(例えば指導教員)の指導を受けること。

1. アンケート調査の計画

これもどんな調査にもいえることだが、ことにアンケート調査の場合は、綿密な計画を立ててから実行しないと失敗する。とくに次の①～⑦に挙げた点については、十分な時間をかけて検討しなければならない。

- ①**何のために調べるか(調査目的)**: 本来これがない調査など存在しないはずなのだが、目的すらはっきりしていない調査の結果を卒論に書く者がいる。一般にアンケート調査は、その目的によって仮説検証型と事実発見型に分けられる。
- ②**何を知りたいか(調査項目)**: 調査目的を達成するためには何を聞いたらいいいのか? 的確な質問事項を考え、無駄な質問を省くことは、調査を成功させる重要なポイントとなる。必要と思われる調査項目を簡条書きにすることから始めて、何度も何度もプレテスト(予備調査)を繰り返しながら、項目を絞り込んでいく。
- ③**誰に聞か(調査対象)**: これも調査目的によって、主婦か学生か、男か女か、など質問すべき相手が異なってくる。このほか統計学的な要請から、全数調査か標本調査か、無作為抽出か有意抽出か、を決定せねばならない。
- ④**何人に聞か(調査規模)**: アンケートの精度、予想される回収率(一般に手間のかからない調査ほど低い)、そして費用ともをらみながら決定する。一般に標本の数は大きいほど良いが、それだけ費用と時間がかかる。
- ⑤**いつ調べるか(調査時期)**: 調査の内容によっては、調査が平日に行われたか休日に行われ

たかによって、結果が異なってくる。また例えば、重大な飛行機事故の直後では飛行機に対するイメージは悪くなるように、調査のタイミングは重要だ。調査する側の都合で勝手に決めると、あとで後悔することになる。

⑥**どのように調べるか(調査方法)**:大きく分類すると、訪問面接法、街頭面接法、電話調査法、集合調査法、留置法、郵送法、などがあり、手間・時間・費用・回収率などにおいて、それぞれ一長一短がある。また、自分一人で調査する以外に、人を雇って調査することも可能だ(その際は調査員に対して綿密な指導が必要)。

⑦**どのように分析するか(分析方法)**:アンケート調査の心臓部ともいえる重要な部分であるにもかかわらず、それを理解していない者が多すぎる。どれほど内容のある調査結果も、正しい分析を行わなければ、ただの紙屑である。もともとアンケート調査とは、分析用のデータを自ら集めるために行うのだから、データを集めてから「さてどういう分析をしようか?」などということはあるはずないのだが、そのへんが解っていない者も多い。調査目的に従い、そのためにはどのような分析が有効で、その分析にはどのような種類のデータが必要かを、まず計画段階で決めておくのが順序であり、最も大切なことである。突然「こんな分析をしたい」と思っても、調査が終わった後では「あとの祭」であり、そうならないためにも調査には綿密な計画が必要なのだ。学生の行うアンケート調査の多くが徒労に終わるのも、このあたりに原因のあることが多い。データの分析は「集計→加工→説明および解釈」の三つのプロセスに分けられる。

集計:単純集計とクロス集計がある。諸君が小学校(中学校?)で習ったのは単純集計。複雑な社会事象を解釈するためには、クロス集計でいどは最低限でも行う必要がある。かつては大量のデータを扱う調査では、その集計だけでも大仕事だったが、コンピュータの登場によって作業量は大幅に緩和され、楽になった(ただしコンピュータを使えればのはなし)。

加工:グラフ化や図化といった基本的な加工のほか、必要に応じて、平均値の算出のような単純な統計処理から、多変量解析(回帰分析、判別分析、因子分析、数量化理論など)のような高度な統計処理を行う。複雑な原因が絡み合う社会事象の解釈には多変量解析は不可欠だが、これを手計算で行うことは不可能に近い(つまりコンピュータの助けが必要)。

説明・解釈:データを加工した結果を読みとること。どれほどコンピュータの性能が上がろうと、結果を読むのは人間の仕事である。例えば、平均値の意味を正しく理解していなければ、調査結果の平均について語ってはならないし、クロス表を書いたら、変数間の独立性の検定(χ^2 検定など)を行っておくのは常識である。要するに勉強(とくに統計学)が必要である。

以上①～⑦の全てについて記載しなければ、無責任な調査と見なされても仕方がない。卒論で社会調査を行うものは、必ず論文中の「調査方法」に、以上の①～⑦の全てについて詳細に記載すること。

2. 質問紙の作製

調査の事実上の山場であり、最も時間がかかり、またかけるべきところである。何度もプレテスト（予備調査）を繰り返しながら質問紙（聞き取り調査の場合も自分で記入する質問紙が必要）を創る必要があるため、最低でも1か月、アンケート調査の初心者の場合、2～3か月かかることも稀ではない。初心者は必ず専門家と相談しながら用紙の作製にあたること。そうしないと必ず失敗する。アンケートや聞き取りを汗水たらして行ったからという理由で、よいアンケート調査をしたと勝手に思い込み、自信たっぷりで卒論を出す者がいるが、アンケート調査の成否の大部分は用紙の作製段階で決まっており、そういう無駄な汗水のことを**徒労**という。

<アンケート調査票作成上の注意>

- ・場合によっては（留置法・郵送法を用いる場合など）、調査票に依頼文も付けなければならない。依頼文は基本的な文書や手紙の書き方に従うこと。
- ・質問の文章には、とくに気を配ること。誤った文章表現などに注意。
- ・質問紙全体のデザインに気を配ること。
- ・質問紙の量は多すぎても少なすぎてもいけない。ふつうはB5かA4サイズで1～2枚程度。

3. アンケート調査の実施

とにかく肉体労働の部分。アンケート用紙の印刷、配布から回収まで、普通で1か月、最低でも2～3週間はかかるもの。郵送法や集合法の場合、切手代や謝礼など、とにかくカネのいることが多い。面接法の場合、大学生ということで無償でも可能だが、とにかく人当たりを良くし頭を下げまくることになる。アンケートをお願いする3か条：①礼儀作法や言葉づかいにはとくに気を遣うこと、②いつも笑顔を忘れず心から感謝の念を持つこと、③たとえ断られても恨まないこと。生保のおばちゃんや新聞勧誘員の苦労の一端が味わえるだろう。

4. データの集計・加工・解釈

条件によって必要な日数は異なる。データの集計と加工は、コンピュータを自由に駆使できれば1週間でも可能だが、手際が悪いと何か月もかかるだろう。データの解釈に至っては、正しい統計学の知識を身につけておかないと、出力されたデータ分析の結果を「読む」ことができず、一生かかっても「正しい」結論を導くことはできない。しかし、この部分がしっかりできていないと、これまでのせっかくの苦労が水の泡になってしまうことは、すでに述べたとおりである。

< 付録 1 >

地理学関連の専門雑誌一覧(国士舘大学図書館所蔵ぶん)

A	アフリカレポート (アジ'研)	Z305 A18	
	アジアアフリカ研究	Z302 A92	
	アジア経済 (アジ'研)	Z302 A92	
	アジア経済資料月報 (アジ'研)	330.3A92	
	アジア経済研究所年報 (アジ'研)	Z302 A92	
	アジア太平洋経済社会年報 (国連)	Z330 A92	
	アジ研ニュース	Z220 A92	
	秋田県気象月報	Z451 A37 (1983, 1984)	
	青森県気象月報	Z451 A54 (1983, 1984)	
	Agricultural and Forest Meteorology	Z450 A19 (Vol.41, 1987~)	
	Annales de geographie (Paris)	Z290 A49 (Vol.1, 1891~)	
	Annals of the Association of American Geographers	Z290 A49 (Vol.1, 1911~)	
	Archives for Meteorology, Geophysics and Bioclimatology, Series A		
	⇒ 新) Meteorology and Atmospheric Physics	Z450 Me83 (Vol.29, 1981~)	
	Archives for Meteorology, Geophysics and Bioclimatology, Series B		
	⇒ 新) Theoretical and Applied Climatology	Z450 Th3 (Vol.29, 1981~)	
	Arctic and Alpine Research	Z450 A68 (Vol.20, 1988~)	
B	貿易と関税	Z678 B62 (7~)	
C	カナダ研究年報	Z319 C15	
	地学雑誌	Z450 C43 (Vol.57, 1947~)	
	地城 (大明堂)	Z290 C44 (1~)	
	地城開発	Z360 C43 (Vol.30~)	
	地形	Z454 C44	
	地球科学	Z450 C44 (Vol.1~)	
	地理 (古今書院)	Z290 C47 (Vol.1~)	
	地理学評論	Z450 C47 (Vol.1~)	
	地理科学	Z290 C47 (49~)	
	地質学雑誌	Z450 C48 (Vol.80~)	
	地質ニュース	Z450 C48 (489, 1995.5~)	
	地質と調査	Z450 C48 (1~)	
	地図	Z291 C49 (1~)	
	Catena	Z290 C26 (Vol.1, 1973~)	
	Climatic Change	Z451 C78 (Vol.16, 1990~)	
D	第四紀研究	Z290 D28 (Vol.1~)	
E	Earth Surface Processes and Landforms	Z450 E11 (Vol.16, 1991~)	
	Economic Geography	Z332 E19 (Vol.1, 1925~)	
	Die Erde	Z290 E67 (Vol.97, 1966~)	
	Erdkunde	Z290 E67 (Vol.20, 1966~)	
F	福島県気象月報	Z451 F84 (1983, 1984)	
G	岳人	Z786 G16 (524~) 鶴川	
	月刊アジ'アフリカ研究	Z302 G32	
	月刊日本の生物	Z460 G32	
	月刊天文	Z440 G32 (57~)	
	月刊地質ニュース⇒地質ニュース	Z450 C48 (489, 1995.5~)	
	Geografiska Annaler (Ser. A)	Z290 G35 (Vol.70, 1988~)	
	Geographical Abstracts: Physical Geography	Z290 G35 (1990~)	
	Geographical Journal	Z290 G35 (Vol.132, 1966~)	

	Geographical Review	Z290 G35	(Vol. 56, 1966~)	
	Geographische Zeitschrift	Z290 G35	(Vol. 35, 1974~)	
	Geography	Z290 G35	(Vol. 63, 1978~)	
	GeoJournal	Z450 G35	(Vol. 1, 1977~)	
	Global Ecology and Biogeography Letters	Z519 G52	(Vol. 1, 1991~)	
H	北海道の気象	Z451 H82	(1983, 1984)	
	Heating and Air Conditioning Journal	Z533 H51	(Vol. 60, 1990~)	
	Heating, Piping and Air Conditioning	Z533 H51	(Vol. 45, 1973~)	
I	茨城県気象月報	Z451 I11	(1983, 1984)	
	遺伝	Z467 I19		
	岩手県気象月報	Z451 I97	(1983, 1984)	
	Institute of British Geographers Transactions and Papers			
	Instruments and Control Systems	Z530 I57	(Vol. 40, 1967~)	
	International Journal of Climatology	Z290 I57	(Vol. 9, 1989~)	
	International Journal of Remote Sensing	Z454 Z54	(Vol. 15, 1994~)	
J	人文地理	Z290 J51	(Vol. 26~)	
	情報処理 (情報処理学会)	Z007 J66	(Vol. 13~)	
	Journal of Biogeography	Z470 J82	(Vol. 17, 1990~)	
	Journal of Climatology ⇒ 新) International Journal of Climatology			Z290 J82 (Vol. 1, 1981~)
	Journal of Cold Regions Engineering	Z540 J82	(Vol. 1, 1987~)	
	Journal of Ecology	Z470 J82	(Vol. 78, 1990~)	
	Journal of Geography	Z290 J82	(Vol. 1, 1902~)	
	Journal of Geology	Z450 J82	(Vol. 86, 1978~)	
	Journal of Irrigation and Drainage Engineering (ASCE)			
	Journal of Sedimentary Research		(1994. 4~)	
	Journal of Soil Science ⇒ 新) European Journal of Soil Science			Z611 J82 (Vol. 24, 1973~)
	Journal of Historical Geography	Z290 J 82	(2001~)	
K	科学	Z400 Ka16	(Vol. 39, 1969~)	
	科学朝日	Z400 Ka16	(Vol. 26, 1966~)	
	海外移住	Z334 Ka21		
	海岸	Z518 Ka21		
	海岸の科学	Z550 Ka21		
	海岸統計 (建設省河川局)	Z518 Ka21		
	観測所気象年報 (気象庁)	Z451 Ka59	(1985~)	
	火災 (日本火災学会)	Z524 Ka72	(Vol. 31~)	
	河川 (河川協会)	Z517 Ka74	(223~)	
	かんきょう (ぎょうせい)	Z519 Ka56	(Vol. 16~)	
	環境情報科学	Z519 Ka56		
	環境科学総合研究所年報	Z519 Ka56		
	環境研究 (公害調査センター)	Z519 Ka56		
	環境と公害	Z579 Ka56	(Vol. 22~)	
	計測と制御	Z501 Ke27	(Vol. 4~)	
	経済 (=月刊経済)	Z330 G32	鶴川	
	経済 (=季刊経済)	Z330 Ke29		
	経済地理学年報	Z330 Ke29	(Vol. 1~)	
	経済統計月報 (日銀統計局)	Z330 Ke29		
	経済統計年報 (日銀統計局)	Z330 Ke29		
	季刊地理学 (=東北地理)	Z291 Ki21		
	季刊人類学 (京都大学人類学会)	Z469 Ki21	(Vol. 1, 1970~)	
	季刊海洋時報 (日本海洋協会)	Z550 Ki21		
	季刊環境研究 ⇒ 環境研究	Z519 Ka56		

	季刊農業総合研究 ⇒ 農業総合研究	Z610 N93 (Vol.1~)
	気候系監視報告 (気象庁)	Z451 Ki22 (90~, 1989~)
	気象 (日本気象協会)	Z451 Ki58 (1988~)
	気象庁月報	Z451 Ki58 (1984~)
	気象庁年報	Z451 Ki58 (1978~)
	気象庁観測技術資料	Z451 Ki58 (1989~)
	気象庁技術報告	(1989~)
	気象研究ノート (日本気象学会)	Z451 Ki58 (1989~)
	気象年鑑 (日本気象協会)	(1984~, 1994, 95, 96欠)
	気象要覧 (気象庁)	Z451 Ki58 (1989~)
	研究時報 (気象庁)	Z451 Ki58 (1989~)
	公害研究	Z519 Ko24 (1~)
	公害と対策	Z519 Ko24 (8~)
	工業立地	Z332 Sa63
	国際協力	Z319 Ko51
	国際協力研究	Z305 Ko51
	国際協力事業団年報	Z319 Ko51
	駒沢地理	Z290 Ko62 (Vol.1~)
	高層月報 (気象庁)	Z451 Ko88 (1991~)
	交通と統計	Z680 Ko94 (Vol.6~)
M	Meteorology and Atmospheric Physics	Z450 Me83 (Vol.38, 1988~)
	Monthly Climatic Data for the World	Z451 Mo38 (Vol.42, 1989~)
	Monthly Report of Meteorological Satellite Center	Z451 Mo38 (1991~)
N	日本統計月報	Z351 N77 (139~)
	日本気候表	Z451 N77
	日本民俗学 (日本民俗学会)	Z380 N77 (Vol.67~)
	日本生気象学会誌	(Vol.32, 1995~)
	日本生態学会誌	Z468 N77 (Vol.38, 1988~)
	日本リモートセンシング学会誌	Z454 N77 (Vol.9~)
	日経ビジネス	Z336 N73 (576~) 鶴川
	日経サイエンス (=ナエンス)	Z400 Sc1 (Vol.3~)
	農業土木学会誌	Z614 N93 (Vol.33~)
	農業土木学会論文集	Z614 N93 (Vol.80~)
	農業気象	Z613 N93 (Vol.1~)
	農業総合研究	Z610 N93 (Vol.1~)
	農業総合研究所年報	Z610 N93 (Vol.33~)
	農業水産統計月報	Z610 N96 (33~)
	農業と経済	Z611 N93 (Vol.1~)
	National Geographic	Z450 N57 (179, 1991~)
	Nature	Z400 N58 (Vol.242, 1974~)
O	大阪府気象月報	Z451 O73 (1983, 1984)
P	Photogrammetric Engineering and Remote Sensing	Z454 P56 (Vol.56, 1990~)
	Professional Geographer	Z290 P94 (Vol.42, 1990~)
	Progress in Physical Geography	Z290 P94 (Vol.12, 1988~)
Q	Quaternary Research	Z450 Q2 (Vol.33, 1990~)
R	歴史地理 (日本歴史地理研究会)	Z205 R25 (Vol.1~)
	歴史地理学	Z290 R25 (Vol.111~)
	歴史地理学紀要	Z290 R25 (Vol.1~)
	歴史地理教育	Z375 R25 (116~)
	Remote Sensing of Environment	Z454 R26 (Vol.31, 1990~)
S	サイエンス ⇒ 日経サイエンス	Z400 Sc1 (Vol.3~)

雪氷	Z451 Se78 (Vol. 47, 1985～)
社会地理 (日本地図)	Z290 Sh12 (Vol. 1～)
社会学評論 (日本社会学会)	Z361 Sh12 (Vol. 11～)
写真測量とリモートセンシング	Z454 Sh13 (Vol. 28～)
資源科学研究所彙報	Z519 Sh29
資源環境対策	Z519 Sh29 (Vol. 28～)
新地理	Z290 Sh61 (Vol. 1～)
新砂防	Z656 Sh69 (Vol. 32～)
自然 (中央公論社)	Z405 Sh93 (23～)
植物と自然	Z405 Sh96 (16～)
週間ダイヤモンド	Z330 Sh99 (70～)
週刊東洋経済	Z330 Sh99 (2977～)
測候時報 (気象庁)	Z451 So32 (58～)
測量 (日本測量協会)	Z521 So32 (Vol. 7～)
水温の研究 (水温調査会)	Z452 Su51 (Vol. 1～)
水利科学	Z517 Su51 (Vol. 23～)
Science	Z405 Sc9 (Vol. 243, 1989～)
T 天気	Z451 Te88 (Vol. 1～)
天気図	Z451 To36 (1991. 1～)
東北地理 ⇒ 季刊地理学	Z291 Ki21
東北大学理科報告 (地理学)	Z290 To25 (Vol. 1～)
東京大学地震研究所彙報	Z453 To46 (Vol. 51～)
東京都気象月報	Z451 To46 (1988～)
東南アジア研究 (京大東南アジア研センター)	Z223 To63 (Vol. 30～)
都市計画 (日本都市計画学会)	Z318 T72 (Vol. 163～)
都市問題 (東京市政調査会)	Z318 To72 (60～)
都市問題 (政府資料調査会)	Z318 To72 (1～)
Theoretical and Applied Climatology	Z450 Th3 (Vol. 37, 1986-)
Transactions of the Institute of British Geographers	Z290-I57 (Vol. 16, 1991-)
U 運輸と経済	Z681 U 77 (1982～1984, 2001～)
Y 山形県気象月報	Z451 Y22 (1983, 1984)
Z Zeitschrift fur Geomorphologie	Z450-Z2 (Vol. 1, 1957-)
Zeitschrift fur Geomorphologie, Supplement	Z450-Z2 (Vol. 84, 1992-)

< 付録 2 >

地理学関連の専門雑誌一覧(地理実習室所蔵ぶん)

- A 愛知大学地理学報告(愛知大学文学部地理学教室)
愛知大学史紀要
秋田地理(秋田地理学会)
Annual Report, Inst. Geoscience, the University of Tsukuba
- B 文教大学地理学報告
Bulletin of Int'l Research Center for Japanese Studies
- C 地域研究年報(筑波大学地球科学系)
地域研究(立正地理学会)
地域研究(鳴門教育大学地理学研究室)
地域学研究(駒澤大学応用地理研究所)
地理(古今書院)
地理学研究(駒沢大学大学院)
地理学報告(千葉大学教育学部地理学研究室)
地理空間(地理空間学会)
地理月報(二宮書店)
地理誌叢(日本大学地理学会)
地誌学研究資料(三重大学人文学部地誌学系)
地図情報(地図情報センター)
地図中心(日本地図センター)
- E えりあくま(群馬地理学会)
ERSDAC(資源環境観測解析センター)
ERSDACニュース(資源環境観測解析センター)
Environmental Research Center Papers(University of Tsukuba)
- G ジオグラフィカ センリガオカ(関西大学文学部地理学教室)
Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University
GIS NEXT(クリエイト・クルーズ)
- H 弘大地理(弘前大学教育学部地理学研究室)
北海道地理(北海道地理学会)
北海道教育大学旭川校地理学報告
法政地理(法政大学地理学会)
法政大学文学部紀要
法政大学日本統計研究所報
法政大学自然地理学報告(法政大学地学研究室)
法政大学大学院地理研究
法政人類学(法政大学人類学研究会)
- I 移民研究(琉球大学)
- J Japanese Progress in Climatology(法政大学地理学科)
JEAS NEWS(日本環境アセスメント協会)
人文地理学研究(筑波大学地球科学系)
JODC ニュース(日本海洋データセンター)
Journal of Sedimentary Research(J. Sedimentary Petrol.)
- K 海洋情報研究センターニューズレター(日本水路協会)
神奈川県温泉地学研究所報告(⇒観測だより)
環境情報研究(千葉敬愛短期大学環境情報研究所)
環境科学研究科年報(筑波大学大学院環境科学研究科)
観光科学研究(首都大学東京)
環日本海地域比較史研究(新潟大学環日本海地域比較史研究会)
活断層研究(活断層研究会)

- 川村学園女子大学研究紀要
 経済と労働（東京都労働経済局）
 研究紀要（地理）（＝日本大学文理学部自然科学研究所紀要）
 季刊沖繩（財団法人沖繩協会）
 近代化と環境変化ニュースレター（立正大地理学教室・近代化と環境変化事務局）
 高度リモートセンシング技術資料（資源観測解析センター）
 皇學館史学（皇學館大學史学会）
 国土地理院時報
 駒澤地理（駒澤大学文学部地理学教室）
 空間・社会・地理思想（大阪市立大学文学部地理学教室）
 京都府立総合資料館紀要
- M 宮崎産業経営大学研究紀要
- N 名古屋地理（名古屋地理学会）
 名古屋大学地理学研究報告
 奈良大地理（奈良大学地理学会）
 奈良大学地理学研究報告
 日本地理学会予稿集
 日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要（地理）
 日本自然保護協会調査報告
- O 大分地理（大分大学教育学部地理学教室）
 お茶の水地理（お茶の水地理学会）
 沖繩地理（沖繩地理学会）
 沖繩問題研究シリーズ（沖繩協会）
- R 歴史地理学野外研究（筑波大学歴史人類学系、歴史地理学研究室）
 リモートセンシング研究所報告（東京理科大学）
 理論地理学ノート（空間の理論研究会）
 立命館地理学（立命館地理学会）
 RESTEC（リモートセンシング技術センター）
 RUGAS（立教大学地理人類学研究）（立教大学文学部地理学教室）
- S 新地理（日本地理教育学会）
 自然保護（日本自然保護協会）
 自然環境科学研究（平岡環境科学研究所）
 秋大地理（秋田大学教育学部地理学研究室）
 Science Reports of the Inst. Geoscience, Univ. Tsukuba
 生態環境研究（国際生態学センター）
 植生学会誌（植生学会）
- T 都市地理学（日本都市地理学会）
 東京大学人文地理学研究（東京大学）
 東北文化研究所紀要（東北学院大学）
 東北大学理科報告（地理学）
 島嶼科学（琉球大学）
 筑波大学水理実験センター報告
 教賀論叢（教賀女子短期大学）
- U Urban Kubota

< 付録 3 >

地理学教室の教員による個人購読雑誌一覧

(図書館よりも長期購読している場合が多いので、図書館に無い場合は問い合わせるとよい)

A	Annals of the Association of American Geographers	(野口)
	Applied Vegetation Science	(磯谷)
	Atoll Research Bulletin	(長谷川)
B	Bulletin of the American Meteorological Society	(野口)
	Biosphere Conservation	(磯谷)
C	地域地理研究	(岡島)
	地域経済学研究	(宮地)
	地形	(長谷川)
	地理学評論	(全員)
	地理月報	(野口)
	地理科学	(加藤)
	地理誌叢	(宮地)
	地図	(長谷川)
	Coral Reefs	(長谷川)
D	第四紀研究	(長谷川)
E	Ecological Research	(磯谷)
	ERSDAC	(長谷川)
F	フードシステム研究	(宮地)
G	GARAXEA(日本サンゴ礁学会誌)	(長谷川)
	GIS理論と応用	(長谷川)
	群落研究(⇒植生学会誌)	(磯谷)
	Geographical Review of Japan	(全員)
H	法政地理	(長谷川)
	保全生態学研究	(磯谷)
J	人文地理	(内田、岡島、宮地)
	Journal of Applied Meteorology	(野口)
	Journal of Climate	(野口)
	Journal of the Meteorological Society of Japan	(野口)
	Journal of Vegetation Science	(野口、磯谷)
	Journal of Forest Research	(磯谷)
K	景観生態学	(長谷川)
	経済地理学年報	(岡島、加藤、宮地)
	季刊地理学(=東北地理)	(長谷川、磯谷、加藤)
	季刊経済理論	(加藤)
	気象年鑑	(野口)
	交通史研究	(岡島)
N	日本リモートセンシング学会誌	(長谷川)
	日本生態学会誌	(磯谷)
	日本林学会誌(⇒日本森林学会誌)	(磯谷)
	日本森林学会誌	(磯谷)
	日本都市学会研究年報	(加藤)
	農業経営研究	(宮地)
	農業市場研究	(宮地)
	農業と経済	(宮地)
	National Geographic	(野口)

P	Professional Geographer	(野口)
	ペドロジスト	(磯谷)
R	歴史地理学	(岡島、宮地)
	ランドスケープ研究	(磯谷)
S	産業連関	(加藤)
	生物科学	(磯谷)
	生態環境研究	(磯谷)
	瀬戸内地理	(岡島)
	写真測距とリモートセンシング	(長谷川)
	新地理	(宮地)
	森林科学	(磯谷)
	森林立地	(磯谷)
	植生史研究	(磯谷)
	自然保護	(長谷川、磯谷)
	植物地理・分類研究	(磯谷)
	植生学会誌 (旧群落研究)	(磯谷)
T	天気	(野口)
	鉄道史学	(岡島)
	都市地理学	(加藤)
	東北地理 (⇒季刊地理学)	(長谷川、磯谷、加藤)
	東北都市学会研究年報	(加藤)
W	WWF J	(長谷川)
	ワイルドライフ・フォーラム	(磯谷)
Y	野生生物保護	(磯谷)

< 付録 4 >

Web内部公開ぶん卒業論文タイトル一覧(2001～2011年度)

以下の卒業論文は、本地理学教室のウェブサイトにて、PDFファイルにより内部公開されている。

2001年度

- 佐藤 一郎 東京都及び周辺地域における酸性雨について
- 梅沢 香織 筑波おろしの特性について
- 中西 千秋 相模川下流域における洪水氾濫区域の土地利用とその経年変化について
- 樋口佐恵子 気象データおよび生活感覚から捉えた「赤城おろし」について
- 梅田 奈美 乗鞍岳における構造土の分布と地形との関係について
- 中村美智子 群馬県片品川の横断面に沿う気温調査
- 滝原 悟 石垣島東岸サンゴ礁海域における陸域からの栄養塩の流入
—晴天時と雨天後の全窒素の変化を中心に—
- 計良 千都 東京湾沿岸地域における夏季の海陸風について
- 溝邊 貴彦 飯豊山地北西部玉川源流部の氷河の認定
- 阿部 潤 宅地造成地に成立した二次草原の帰化率について
—神奈川県横須賀市湘南山手地区を例にして—
- 木村真理子 東京西部におけるスギの衰退現象
- 福岡 裕介 白山における「お花畑」景観の分類と分布について
- 岸 明子 蔵王山刈田岳付近におけるアオモリトドマツの枯死・更新パターンとその立地環境について
- 石原 祐介 東京都江東区におけるブタクサ・オオブタクサの分布と生態
- 荒井 義幸 三浦半島森戸川流域におけるネコノメソウ属2種の分布とその生育環境について
- 奥山友希乃 静岡県清水市三保半島海岸最前列におけるクロマツの樹形と生育状況について
- 小島 穂高 首都圏における日本なし産地の地域的特性—品種を中心に—
- 山田 尚人 地方都市における路面電車の可能性と路線環境
—富山地方鉄道市内線と加越能鉄道万葉線を事例として—
- 中臣 雅史 住宅物件と居住者の特性から見た地域的特徴
—新宿、成城、新百合ヶ丘の三地域を事例として—
- 山田 宏幸 明治期から昭和初期における神奈川県三浦半島の鉄道敷設過程
- 高橋 潤 静岡県における茶業経営 —静岡県榛原郡川根町・小笠郡菊川町を事例に—
- 木村 郁子 山形県酒田市における生活環境評価 —生活関連施設を指標として—
- 古村 勇一 子どもの属性と遊び環境の違いによる手描き地図の比較
- 辻 崇史 整備新幹線が地域に与える影響 —長野新幹線を事例に—

2002年度

- 三浦 拓朗 谷川岳の登山道荒廃について —利用形態の異なる二方面からの登山道の比較—

樋口健太郎	八ヶ岳西岳南西斜面のカラマツ植林と二次林の群落構造 —特にチョウセンゴヨウとトウヒ属バラモミ節樹木の分布に着目して—
野原 秀子	千葉県白子町の水害に対する地域特性について
三橋 和則	千葉県北部鹿島川流域における放棄水田の植生
内山 慶之	伊豆半島東岸河津町付近における二次林の種組成と分布に地質がおよぼす影響
森山 達矢	伊豆半島松崎町におけるニホンイノシシの分布拡大とその要因
鈴木 敬子	活断層トレンチ調査壁面を用いた断層変位地形の復元
小峰 邦良	高麗川中・上流域におけるニセアカシア林の分布と生態
林 清子	新潟県石打丸山スキー場の放置グレンデにおける遷移の進行について
藤原 裕子	石垣島白保サンゴ礁浅海域の海草帯の経年変化
松木 哲也	外出行動の違いによる知覚環境の性差について
白井清太郎	都市公園における利用者の行動 —代々木公園を事例として—
廣井 敏之	東京の観光イメージ変遷 —観光用印刷メディアの定量化の試み—
吉田 祐一	茨城県波崎町における不耕作農地の新しい土地利用
黒川 和樹	東京都における自動車交通の空間的形態
小関 英治	都市モノレールの現状と課題 —多摩都市モノレールと千葉都市モノレールを事例に—
伊勢田 晋	神奈川県内主要道路における渋滞発生原因及び改善策の効果について

2003年度

桑田 裕子	茨城県阿字ヶ浦海岸における近年の海浜変形
木下 奏緑	農業的土地利用の季節変化と赤土流出との関連 —沖縄県石垣島轟川を例に—
狩野 奈々	多摩市における都市化と水害の危険性の考察
里村 絵美	3DCADを用いた相模川下流域海老名周辺の埋没段丘の復元
嶋田 昇馬	山地河川地域における地質と水系網特性の関係について —木曾川上流部を例に—
星野 秀明	軽井沢における植生景観の特徴について
釜井 勝浩	三浦半島におけるヨシノボリ類の分布限界について
戸塚 裕一	大規模住宅団地における気温分布とヒートアイランド強度について —埼玉県東南部三郷団地を例に—
今井 正人	日本海側における気温と積雪の関係について
須藤 亘	三浦半島南部の海岸草本植生 —人為の有無に着目して—
中村 冬姫	三浦半島中部におけるタイワンリスの分布と分布拡大
佐々木陽一朗	仙台の海陸風
鹿島 芙深	東京の外国人宿にみる「日本文化」の演出
立花 誠治	東京都・神奈川県におけるブックオフの立地展開
加藤 郷	静岡県浜松市における農業生産法人の成立と存続要因
中島 晶子	地名変更に伴う地域への愛着の変化 —埼玉県さいたま市を事例として—
池澤 鉄平	防火機能に焦点を当てた城下町の空間構造の研究 —群馬県近世安中城下町を中心に—
福島 克	埼玉高速鉄道線開通による沿線地域への影響

金原 正人 有機農産物認証団体の活動が農家に与える影響 —千葉県と神奈川県を事例として—

2004年度

- 馬渡 明 伊豆半島における東岸と西岸の気候特性の違い —房総不連続線との関係を中心に—
- 石月 拓洋 越後駒ヶ岳における雪崩地形の分布と特徴 —アバランチ・シュートと筋状地形を例に—
- 上田季美恵 地震災害における避難場所の安全性評価 —船橋市・市川市・松戸市・鎌ヶ谷市を事例に—
- 秋山 功治 ヒートアイランド現象と土地利用・天候との関係について
—東京都立川市と日野市の一部を例に—
- 長沢 直人 新潟県柏崎市における人工改変を受けた地形の特徴
—4 時期の地形図をもとにしたGISによる解析—
- 小林 俊輔 山梨県北部乙女高原の尾根型斜面に成立する林分の構造と更新
- 片山 容輔 三浦半島二子山付近における南・北斜面間の比較による
常緑および夏緑広葉二次林の主要構成樹種の違い
- 牛木 拓真 東京都草花丘陵における谷頭凹地の樹種構成の特徴
- 富田 崇 山梨県松姫峠付近の落葉広葉樹林における主要構成樹種の更新状況について
- 保立 優子 静岡県伊豆半島北東部におけるニホンイノシシによる農作物被害と被害対策の現状
- 清水 記久 横須賀城下町の歴史的変遷と地域構造
- 碓田 真一 川越市における中心商店街の変容と来街者の変化
- 西 菜保美 青梅街道沿いにおける建築物スカイラインの形成要因
- 林 聡子 東京都台東区における子どもの遊び空間の三世代変化
- 鈴木 俊之 東京湾アクアラインと房総の観光産業の現状

2005年度

- 池田 翔 茨城県北西部におけるイノシシ・ハクビシンによる農作物被害と被害対策の現状
- 小野 偉子 隆起ベンチの形成とそれに関わる岩石の力学的性質
—青森県津軽西海岸大戸瀬付近を例に—
- 上江洲智彦 沖縄県の米軍基地周辺における環境変化の一例 —金武町周辺地域を対象に—
- 藤田 泰文 針葉樹人工林内に侵入した落葉林冠木の分布・組成およびその成立過程と機能について
- 久谷 仁美 新潟県南西部周辺域における地上風系 —1994年1月から12月を例に—
- 根本 和世 霞ヶ浦周辺地域のスギ衰退の現状とその要因
- 三好 研一 玉川上水分水における近現代にみられる機能変化と変遷 —福生分水・拝島分水を中心に—
- 高久 泰則 近世城下町の近現代における変遷過程 —宇都宮と小田原を事例に—
- 公塚 裕幸 近現代における渋谷駅を中心とする交通網の変容 —バス路線網を中心に—
- 本多奈美子 コンビニエンスストアの立地地点と取扱商品
—武蔵野市に立地するCVSと国道20号線沿いに立地するセブンイレブンを事例に—
- 内藤 正樹 後追い調査からみた川越市中心商店街の利用形態
- 嶋田 悠希 大宮駅前商店街の変容とその要因
- 鈴木 秀典 スパリゾートハワイアンズにおけるハワイイメージの形成

- 本多 亜矢子 来場者の視点から見たテーマパーク —東武ワールドスクエアを事例に—
 森田 和樹 エコツーリズムの地域的展開と問題点 —沖縄県各島での事例をもとに—
 高島 正和 農村景観のイメージ —景観写真を用いた調査からの比較—
 小早川 享泰 風力発電の導入とその地域に及ぼす影響 —青森県深浦町と東通村の事例を通して—
 東野 雅俊 学校校歌における地理的景観イメージの表現 —神奈川県川崎市を例に—

2006年度

- 高水 泰裕 東京都奥多摩町日原川における河川性サケ科魚類の分布とその生息環境について
 原 恒太 秋田県雄物川下流域における洪水災害による土地利用変化
 中澤 健 沖縄県西表島における耕作放棄地に成立した植生の変遷
 —二次遷移初期における種構成と先駆性樹種の成長特性—
 南 児栄 日本でのオオカミ復元活動の現状とその可能性について
 吉田 慈美 東京のヒートアイランド現象と風の影響について
 山中 知明 二つの視点から見た波食地形の解析 —伊豆大島・湯の浜海岸を例に—
 宮下 智宏 鉄道建設の地域的展開の差異 —1920年代の山形県村山地方と静岡県遠州地方を例にして—
 大矢 康一 東京都におけるコミュニティバスの現状と課題 —杉並区・西東京市を事例として—
 内田 祥子 長野市中央通り商店街における商店街の変容と地域内分化
 安彦 裕輔 千葉県南部地域における高速バス路線の現状と課題
 橋本紗代子 九州北部の歴史的町並みにおける観光客のイメージ

2007年度

- 島田 康弘 多摩丘陵北部黒川地区における水田畦畔草原の種組成について
 —日照環境の違いに着目して—
 水谷 剛章 久米島ハテナハマ洲島における近年の海岸線変化 —オルソ空中写真による検討—
 野澤 健大 分布限界域における竹林の分布とその拡大状況
 森田 梓 埼玉県秩父盆地における山谷風について
 三浦 吉寛 千葉県富津岬における南北の海岸草原の違い
 河合 雄基 千葉県松戸市松戸駅周辺におけるカラスの営巣木の分布とその環境について
 太田小百合 山形県における芋煮食の地域性
 馬淵 幸子 伝統的町並みにおけるイメージと演出
 呉 亜鳴 新宿駅周辺の空間利用について —新宿2丁目・新宿1丁目を中心として—
 上村由梨果 横浜市におけるスカーフ産業の縮小と検染工業の現況
 小池 友恵 作家、三浦綾子が描いた北海道 —故郷としての場所と信仰を深める場所—
 原田 隼 台東区におけるマンガ喫茶の立地展開
 山添 啓介 町田市における衣料品小売店の立地

2008年度

- 伊藤 愛 神奈川県鎌倉市に生息するハナアブ科昆虫の分類と分布について

- 佐藤 圭 九州地方における降雨パターンの経年変化
- 井澤 雄人 マウンテンバイクレジャーによる山地斜面の荒廃
－専用コースにおける山道の荒廃状況から視た影響－
- 熊倉 謙 サング礁における縁溝、縁脚系地形の特徴について
－喜界島・伊是名島・渡嘉敷島・多良間島における地域差とその原因－
- 中川 佳子 埼玉県平野部におけるカワウの採食環境の特徴について
- 岩崎 慶太 照葉樹林分布限界の二次林における主な照葉樹の分布
および立地環境に応じた種組成・種多様性の違いについて
- 近藤 博史 中国山地東部地域におけるシオジ林とサワグルミ林の分布と組成およびそれら規定要因
- 田中祐太郎 北海道小樽市忍路湾と神奈川県三浦市江奈湾に生息するトビの行動の比較研究
- 竹内 えり 東北および中部日本における逆断層に伴う撓曲崖の形状について
- 舟木 和俊 島根県松江市における水田畦畔の植生
－棚田と平野部および畦畔微地形の種組成の違いに着目して－
- 陳 曉芬 留学生の生活時間と空間行動 ー国士舘大学を事例にー
- 羽鳥 舞 千葉市における宿泊施設の立地展開
- 西潟 秀平 秀吉系大名によるヨコ町型城下町の建設 ー池田輝政を事例にー
- 池田 雄斗 奈良県明日香村における「ふるさと」演出と古都飛鳥観光の真正性
- 真分 純也 小売業競争激化に伴うコンビニチェーンの経営戦略の変化とその意義
ー栃木県宇都宮市におけるコンビニエンスストアの立地展開と取扱商品からの考察ー
- 高腿 幸大 中部地方における神社と信仰の分布についての考察

2009年度

- 木村 厚俊 静岡県南部恵比須島における波食棚の微地形について
- 市川 拓弘 全国における降水パターンの地域性とその経年変化について
- 甘利 尚也 山梨県芦川峡における河食ポットホルの分布状況と形態について
- 伊藤恵里子 琉球諸島における高島と低島の土地利用変化
ー二時期の土地利用図と農林業センサスによる考察ー
- 飯塚 正樹 薩摩硫黄島におけるガリ侵食の経年変化
ー1946年～2007年のオルソ空中写真による分析ー
- 福島 清 首都圏における鉄道利用客数の変化と郊外都市の発展
- 藤岡 巧 千葉県旭市における環境保全型農業の存在意義 ー旭地区を事例としてー
- 向後 知美 農産物直売所の現状と課題 ー千葉県の直売所を事例にー

2010年度

- 小坂 真耶 東限におけるイヌガシ (*Neolitsea acciculata*) 個体群の分布と生育環境について
- 根岸 暢 沖縄県多良間島における海浜堆積物の粒度分布について
- 孫 欣 長江河口域における堆積島の成長 ー地形図・時系列衛星データに基づく考察ー
- 松本奈津美 裾礁海岸における海岸砂丘の発達 ー沖縄県多良間島を例にー

- 遠藤 駿 佐渡島のスギ人工林内に侵入した広葉樹の標高にともなう種構成の変化について
- 小野里 恵 日本における流れ山地形の分布と比較
- 青木 恭子 山梨県御勅川扇状地の地下構造
- 古山 晴香 近年におけるファミリーレストランの立地展開 ー千葉県を中心にー
- 関口 直人 地方ローカル線の利用実態と課題 ー三陸鉄道を事例にー
- 盧 娜 秋葉原におけるソフトウェア企業の立地と中国系ソフトウェア企業 の特徴
- 市川 桃子 学校給食にみる地産地消活動の地域性と存立条件 ー埼玉県を事例にー
- 佐野 祐基 コミュニティバスの路線再編による地域内交通網の変化について
ー埼玉県川越市を事例としてー
- 柳村 大地 中山間地域における耕作放棄地対策の現状と課題 ー岩手県一関市を事例にー
- 千葉 隼人 小中学校校歌の歌詞から見た地域景観イメージについて ー茨城県南東部を例にー

2011年度

- 佐京 峻太 近年における家電量販店の立地展開 ー千葉県を事例にー
- 王 偉 最近50年間における日本と中国の都市気温上昇について
- 押切せかい 足立区における地域イメージとその背景
- 永井麻由佳 長野県鉢伏山における構造土の分布について
- 門田 和也 埼玉県中央地域における銭湯とスーパー銭湯の共存
- 結城 正浩 新潟県長岡市における中心市街地の変容と活性化事業の展開
- 梁 国響 賑わいのある商店街の現状 ー新小岩駅前ルミエール商店街の事例ー
- 方波見佳央 スダジイ (*Castanopsis sieboldii*) の海岸部から内陸部にかけての成長の違い
ー茨城県鉾田市周辺を例としてー
- 山本 正樹 気温分布における東京の地域代表性
- 赤松 未来 新聞折込におけるエリアマーケティング ー地理学的方法で考察するー
- 季 彦 東京23区における外国語案内標記の現状と課題 ー鉄道駅の案内標記を対象としてー
- 緑川 達也 東京大都市圏におけるヒートアイランド強度 ー特に方位による違いについてー
- 都野守貴裕 地方公共交通の存続へ向けた沿線地域社会の取り組みとその有効性
ー真岡鐵道を事例としてー
- 関根 悟 水稲作産地における農業生産法人の経営特性 ー新潟県新潟市白根地区を事例にー
- 佐々木正幸 近代における鬼怒川水運の展開 ー水海道河岸を中心にー